

VIEWnext

学校の今に寄り添い、先生方とともに未来を描く

「ビューネクスト」高校版

2022
October

10

特集

高大接続の視点で見通す

2025年度 大学入試

指導変革の軌跡

愛媛県立松山南高校

発問・課題設定をキーに見る

主体的・対話的で深い学び 授業実践

情報

東京都立神代高校

稲垣俊介

国語

大阪府立泉大津高校

片畑友亮

群馬県立
高崎高校

Photo Session at Cover



遠く離れた世界の問題を
自分事するには？



写真右から、^{さわさと}澤里さん、^{りゅう}近藤さん、^い村田さん、^{まき}榎さん、^{りゅう}劉さん。

未来を描く！ 創る！

イノベティブな
生徒たち

第9回

私たちにできることは何か？ 問い続けた「ウクライナの命を救う方法」

近藤まなさん(高校3年生)／^{さわさと ゆず}**澤里柚寿**さん(高校3年生)／^{まき}**榎 愛**さん(高校3年生)

村田春菜さん(高校3年生)／^{りゅう い ちん}**劉 伊晴**さん(高校3年生)

北海道・私立立命館慶祥中学校・高校

2 022年2月24日、ロシア連

邦が、ウクライナへの軍事侵攻を開始した。戦火から逃れようと国境を越える市民の様子を伝える報道は、ウクライナから遠く離れた日本の高校生にも、戦争が現実にある恐怖であることを知らしめた。

「それまで、私たちにとって戦争とは、歴史上の出来事でした。しかし、命からがら外国に避難する女性や子どもの姿を見らうちに、この悲惨な現実に対して、私たちに何かできることはないのだろうか、仲のよい5人で話し合うようになりました」(近藤まなさん)

国際支援に取り組むNPOが主催する勉強会に参加したり、SNSで戦地の人々の状況に関する情報を収集したりしながら、自分たちにできる「1人でも多くの命を救う方法」について、検討を続けた。

「お金と物資、どちらを送るのがよいのか、そもそもどこに送るのがよいのか、皆の意見がまとまらず、連日、深夜までSNSや電話で話し合いました。最終的には、ウクライナの隣国のモルドバ共和国にお金を送ることが、一番効果的だという結

読者の先生方がご存じの「イノベティブな生徒たち」をご推薦ください！

ご推薦いただける場合は、右の2次元コードをスマートフォン等で読み取っていただき、フォームに沿ってご推薦内容をご入力ください。



教師たち



北海道・私立
立命館慶祥中学校・高校
3学年担任

里見直人

自分事にする生徒の力を 信じ、応援する

「ウクライナ避難民のための募金活動をしたい」という相談を受けた時は、受験学年を間近にした春季休業中に、そのようなことを計画していたのかと、驚きました。「モルドバ大使館にいきなり連絡しても大丈夫でしょうか」と聞くので、念のため、メールの文面を確認した上で、「うまくいくといいね」と、声をかけました。その後、生徒が作成した企画書を見て、最大の効果が得られる支援のあり方を粘り強く追求してきたことが分かりました。率直に、すごい生徒たちだと思いました。今回の活動を通じて生徒は、自分が一步を踏み出すことが、多くの人に影響を与えることを知ったはずです。学校では、1人の生徒の行動が、ほかの生徒にどんどん伝播します。世界の問題を自分事として捉えた新たな生徒が現れた時、その思いをくみ取って、見守り、応援することが、私たち教師の役割だと思っています。

論に至りました」（村田春菜さん）
意見がまとまったのは、モルドバが、欧州最貧国でありながら、人口1人あたりで最も多くの避難民を受け入れていること、そして、ボランティアが中心となって避難民のための炊き出しなどを行っていることを知ったからだ。そうした現状があるにもかかわらず、モルドバは日本での認知度が低いため、寄付が集まりにくいのではないかと、5人は考えた。そこで、駐日モルドバ大使館にメールを送り、寄付金の使途は避難民のための食料などの購入に限定するという約束を得た上で、3年生になった4月に、校内で募金活動を行う企画書を校長に提出した。

募

金活動は、同校の中学校内で3日間、高校内で3日間、さらに札幌市内の街頭と保護者会イベントで1日ずつ実施した。

「高校の生徒会長の私は、中学校の生徒会に募金活動への協力を依頼しました。『武器の購入にお金が使われることは本当にないのか』といった中学生からの質問に対して、5人で話し合ってきたことを踏まえて、一つひとつ丁寧に回答していき

ました」（澤里柚寿さん）

「初めての街頭での募金活動は不安でしたが、募金だけでなく、応援の声をかけてくれる方もいて、多くの人が私たちの思いに共感してくれただと感じました」（槇愛さん）

モルドバ大使館に送った募金額は、最終的には64万円を超えた。

「今までは、社会問題に関心を持つたとしても、どこかひとごとで、一步を踏み出すことができませんでした。でもこれからは、自分のできることをどんどんやってみようと思っています」（劉伊晴さん）

もちろん、一步を踏み出したその後の道のりは、平たんではなかった。

「必要な支援を知るため、同じ年代のウクライナ人女性とSNSで話をした時、『平和に暮らすあなたにはきつと何も分らない』と言われました。戦争で苦しむ人々たちへの支援だなんて、おこがましいのかもしれないと落ち込み、皆にも打ち明け

られずにいました。でも、皆が集めた情報や現地の声を聞くうちに、できることはやっぱりやってみようと、思い直しました」（村田さん）

世界の問題をひとごととせず、自分のできることをする。正解のない長い道のりを歩けたのは、ともに歩く仲間が隣にいたからだ。



札幌駅近くでの募金活動の様子。5時間の募金活動では、一般の人々から約17万円の支援を集めることができた。

学校プロフィール

設立 1996（平成8）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年318人
2022年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、旭川医科大学、北海道大、東北大、京大、京都大、大阪大、札幌医科大学などに78人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、立命館大などに延べ476人が合格。



3

特集

2025年度 大学入試 高大接続の視点で見通す

巻頭 未来を描く！ 創る！
イノベティブな生徒たち
近藤まなさん（高校3年生）
澤里柚寿さん（高校3年生）
槇 愛さん（高校3年生）
村田春菜さん（高校3年生）
劉 伊晴さん（高校3年生）
北海道・私立立命館慶祥中学校・高校

38 これからの進路指導のための
世の中トレンド解説
トレンド・ワード
水ストレス

60 Reader's VIEW

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、VIEWnext ONLINE のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷製本／（株）協同プレス
編集協力／（有）ペンダコ
執筆協力／二宮良太、長谷川 敦
撮影協力／荒川 潤、岸 隆子、ヤマガチイキ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。 ※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2022

27 For School Section

28 お勧めの分掌▶ 管理職 教務担当 進路担当

指導変革の軌跡

愛媛県立松山南高校

外部人材の活用

大学生スクールサポーター # ICT 教育支援員 # 卒業生の活用

32 お勧めの分掌▶ 学年団 担任

輝く学年団を訪ねて

岩手県立葛巻高校 3学年団

自立と自律 # 適度に手をかけない指導 # あたり前を見直す

36 お勧めの分掌▶ 管理職

学校危機管理 基礎講座

テーマ 外部人材の活用における留意点

ALT # 部活動指導員 # 指揮命令権の有無 # 雇用形態と契約内容の確認

39 For Teacher Section

40 お勧めの分掌▶ 教務担当 担任

発問・課題設定をキーに見る 主体的・対話的で深い学び 授業実践

40 情報

東京都立神代高校 稲垣俊介

単元の最初に学ぶ意味を考えさせる # 学習内容を自分事化 # 自作動画を公開

44 国語

大阪府立泉大津高校 片畑友亮

現代の国語 # 学びの舞台 # パフォーマンス課題 # 学びの地図

48 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導

和歌山県立田辺高校

1・2年次 ポートフォリオの活用

ICTを活用した活動記録の蓄積 # 「これまで」と「これから」の接続

50 お勧めの分掌▶ 進路担当 学年団 担任

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走 クローズアップ！ 就職指導

大阪府立布施北高校

低学年次からの就職観の育成 1年次・2年次

日本型デュアルシステム # 週1回の「出勤」 # エンパワメントタイム

52 お勧めの分掌▶ 学年団

チーム新課程学年主任

11月12月のポイント

キャリア意識の醸成 # 文理選択 # テーマ別情報交換会

高大接続の視点で見通す 2025年度大学入試

大学入試において、入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす変更等がある場合、大学はその内容を、2年程度前を目途に、可能な限り早期に公表に努めることが求められます。新学習指導要領に対応した最初の入試となる、現高校1年生が受験する2025年度大学入試は、まさにそれに該当し、2年程度前にあたる今年度が公表のタイミングです。しかし、公表済みの大学は22年9月15日時点で、国立27大学、公立16大学、私立11大学と、全体的に公表のペースは鈍く、一方で、高校では、日々の授業は進み、学校によっては高1生の文理選択の時期が迫ってきています。そうした先行きが不透明な状況の中、25年度入試に向けて、どのような方向性の下、どういった準備や対応をすればよいのか——多くの先生方がお持ちであろうその疑問や迷いが少しでも解消されるよう、今号では、25年度入試の基本情報を整理した上で、個別大学の25年度入試の方針を踏まえた、今後高校が取り組むべき課題を提示いたしました。その課題に先進的に取り組む高校の事例も含め、今号の特集が、25年度入試への道しるべの1つになりました幸いです。なお、11月11日（金）に実施するVIEW next 編集部主催のオンラインセミナーでは、25年度入試の最新情報をお届けする予定です。ぜひ、お申し込みください（同セミナーの詳しいご案内は、今号P.26をご覧ください）。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 2025年度大学入試の動向 2025年度大学入試に関する情報を整理

日本の学校教育の変化／近年の大学入試の傾向／2025年度大学入試情報

P.8 **大学インタビュー 1 青山学院大学** 理念に掲げた人材像の育成に向けて、一般選抜で記述・論述式問題を拡大

P.10 **大学インタビュー 2 大阪大学** 研究に取り組む上で必要な資質・能力を明らかにし、社会課題に挑む人材の育成を目指す

P.12 **大学インタビュー 3 九州工業大学** 数理・データサイエンス・AIを、専門分野に応用・活用できる技術者の育成を目指す

P.14 **大学インタビュー 4 佐賀大学** 入学後の学生の活躍ぶりを踏まえて、高校での自主的な活動を重視した入学者選抜を実施

P.16 高校が取り組むべき課題と事例 2025年度大学入試に向けた高校の検討課題

観点① 教育課程や教育活動の見直し／観点② 探究学習と総合型・学校推薦型選抜

P.18 **高校実践事例 1 京都府・京都市立堀川高校**

生徒主体で学び方を学ぶ、週1コマの「学びのアセスメント」で、生徒の自己調整力を高める

P.21 **高校実践事例 2 山形県立山形北高校**

探究の重要な要素を「探究の思考」に整理。希望進路の実現につながる力を育む

P.24 本特集テーマのnext 大学入試におけるCBTが秘める可能性と今後の課題

名古屋工業大学大学院 工学研究科教授、アドミッションオフィス長

大学入試センター 大学入学共通テスト企画委員会CBT活用検討部会委員 林 篤裕

あつひろ

2025年度大学入試に関する情報を整理

本特集ではまず、高大接続改革が進められる背景にある社会の変化や、近年の大学入試の傾向を押さえるとともに、2022年9月27日時点で各大学が公表した25年度大学入試に関する情報の中で、高校が注目すべきポイントを整理。さらに、個別大学の動向として、多面的・総合的評価を推進する4大学に、25年度入試に関する方針や、その背景にある大学が求める人材像、大学の学びを通じて育成する資質・能力などについて、話を聞いた。

日本の学校教育の変化

「探究」「文理横断」「AI人材」を 切り口に、大学・高校教育が変わる

教育・人材に関する政策の方向性をまとめた「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(※1)では、デジタル化が進み、新たな価値創造とイノベーションが求められる社会においては、文理を問わず、データサイエンスの知識・技能と、様々な視点を備えた人材が必要であることが示された。そうした人材の育成に向けては、文理横断的に学ぶことが大切であると指摘している。

また、経済産業省「未来人材会

議」では、2050年に必要の高い能力として、「問題発見力」「的確な予測」「革新性」などを上位に挙げた。そして、それらの能力の育成に向けては、知識の習得と探究力の鍛錬との間をらせん状に循環しながら能力を高めていく教育の重要性が示唆された。

大学教育は、そうした社会の要請に対応して既に変化している。その1つが、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」だ。同制度は、デジタル人材の不足に対応するため、数理系の基

図1 高大接続改革を取り巻く環境変化の全体像



※編集部で作成。

※1 内閣府に設置された、重要政策に関する会議の1つである「総合科学技術・イノベーション会議」の教育・人材育成ワーキンググループがまとめた。

基礎的リテラシーの裾野を広げることと、トップクラスの人材を育成する施策である。数理・データサイエンス教育に関する正規課程教育のうち、一定の要件を満たした優れた教育プログラムを文部科学省が認定・支援する。21年度から認定が始まり、基礎的な能力を育成する「リテラシーレベル」には、国公私立合わせて162大学が認定された。同プログラムは、多くの大学が、文理を問わず全学共通科目として実施する予定だ。そのため、高校においても、文理を問わず数学や情報をしっかり履修しておかなければ、大学入学後に厳しい状況に置かれることが予想される。

以上のような情報から、①探究、②文理横断・STEAM教育・総合知、③AI人材が、今後の日本の教育におけるキーワードであり、社会↓大学教育↓大学入試↓高校教育と、連動していることが分かる(図1)。高校教育では、探究学習や数理系の学び、文理分断からの脱却が、今後一層推進されている、大学入試への対応もそうした視点が鍵となっていくだろう。

近年の大学入試の傾向

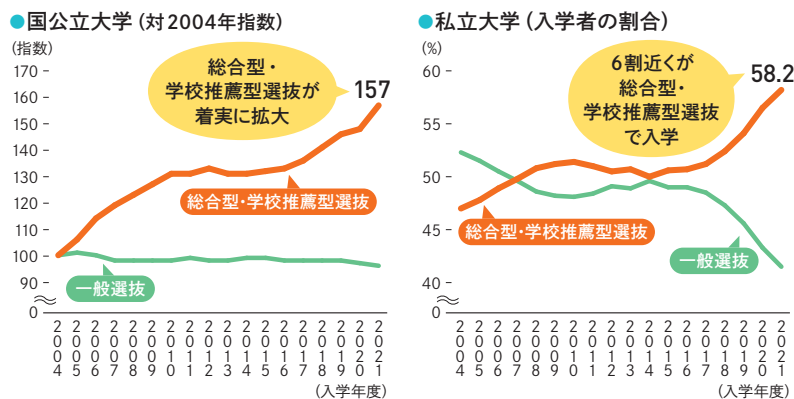
総合型・学校推薦型選抜の拡大が継続。様々な方法で「探究型の入試」を実施

大学教育の変化に応じて、大学入試での評価の重点が転換しており、総合型選抜と学校推薦型選抜による入学者数は着実に増加している(図2)。国立大学協会が目標に掲げる、両選抜方式の入学者が入学定員の30%(*2)には到達していないが、国立大学では、22年度の入学定員の19%が両選抜方式の入学者だ(*3)。

総合型選抜では、探究の観点で受験生を評価し、スムーズな高大接続を図ろうとする大学が増えている。大学はまさに探究をする機関であり、高校時代の探究が大学での研究につながると考えるからだ。各大学は選抜方法を様々な工夫しており(図3)、いわゆる「探究型の入試」の拡大傾向は、今後とも続くと思える。

大学での生徒の活躍を考える「探究型の入試」で評価される

図2 総合型・学校推薦型選抜、一般選抜による入学者数の推移



* 文部科学省公表資料を基に編集部で作成。

図3 「探究型の入試」の種類と、実施大学

実績・プロセス評価型	探究活動の成果やプロセスから得たものを評価	- 大分大学経済学部/総合型選抜〈課題探究〉 - 桜美林大学/探究入試 Spiral - 工学院大学/探究成果活用型選抜
高大接続型	大学と連携した探究活動の成果を評価	- 金沢大学/KUGS 特別入試 - 崇城大学/探究活動プロGRESS選抜
資質・能力評価型	探究型の資質・能力を評価	- お茶の水女子大学/新フロンティア入試 - 奈良女子大学/探究力入試「Q」 - 島根大学/へるん入試 - 立命館アジア太平洋大学/世界を変える人材育成入試 ～ロジカル・フラワー・チャート入試～

※編集部で作成。

* 2 「2020年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—(令和3年9月17日改訂)」による。

* 3 文部科学省「令和4年度国立大学入学者選抜の概要」による。

基本的に現行課程を引き継いだ科目設定。 地理歴史・公民の科目選択に要注意

25年度入試の出題教科・科目は、各大学が22年度中に予告・公表することになっている。文部科学省から、可能な限り早期に検討し、予告・公表するよう通知があったが、22年9月時点で予告・公表した大学は決して多くない。例えば、「情報Ⅰ」の扱いや大学入学共通テストで課す科目のみを公表するなど、段階的に公表する大学も少なくない。

ここでは、各大学が公表した22年9月時点の情報から分かることを整理した。VIEWnext編集部が11月11日に開催するオンラインセミナーでは、最新の公表情報を整理して伝える予定だ（P.26参照）。

高校の学習指導要領が改訂されても、大学のアドミッション・ポリシーが大きく変化することは基本的にはない。大学入学共通テ

ストにおける「情報Ⅰ」の新設は非常に大きな変化だが、それ以外は、全体的に、現行課程の教科・科目を引き継いだ入試科目が設定されている。ただ一部には、25年度入試を機に、入試のあり方を見直す大学・学部もある。自校の生徒に進学希望者が多い大学の入試科目の予告・公表には注目してもらいたい。

国語

◎大学入学共通テスト

試験時間が現行の80分から90分となる。大問の構成については未定。

◎個別学力検査

現行入試で「国語総合」を課している大学・学部は、おおむね「現代の国語」「言語文化」に、「現代文B」「古典B」を課している大学・学部は、おおむね「論理国語」「文学国語」「古典探究」に読み替える形で指定しており、入試科目の実態としては大きな変化はないと言える。

地理歴史・公民

◎大学入学共通テスト

①『地理総合、地理探究』、②『歴史総合、日本史探究』、③『歴史総合、世界史探究』、④『地理総合、歴史総合、公共（から2科目）』、⑤『公共、倫理』、⑥『公共、政治・経済』の6科目から最大2科目の選択となる。同じ科目がある組み合わせは、②と③の組み合わせを除いて受験できないので、要注意だ。

6科目のうち、④を除く5つの出題科目は、ほぼすべての大学で利用される。④は、現行入試で「地理A」「日本史A」「世界史A」を利用しない大学・学部において利用されないことが多い傾向にある。つまり、難関大学や文系学部、医学部において利用されない傾向にある。

また、長崎大学（教育学部学校教育教員養成課程中学校教育コース文系前期）のように、現行入試で「地理A」「日本史A」「世界史A」での受験が可能でも、25年度入試では、④で受験ができない場合があるので、注意したい（図4）。

◎個別学力検査

歴史については、東京大学（文科一～三類）のように、「日本史探究」「世界史探究」を出題科目とした大学と、早稲田大学（人間科学部）のように、「歴史総合、日本史探究」「歴史総合、世界史探究」とした大学に分かれる。後者の場合、学習院大学が公表した資料には、「歴史総合」を履修していない「旧教育課程履修者に不利とならないよう配慮して出題」と明記されていた。明記していない大学も、出題上で配慮するものと予想される。

図4 大学入学共通テストにて地理歴史・公民を課す際の『地理総合、歴史総合、公共』の選択

地理歴史・公民を課す際に『地理総合、歴史総合、公共』の選択を可とする大学	旭川医科大学・医（看護）・帯広畜産大学・室蘭工業大学・筑波技術大学・筑波大学・宇都宮大学・東京学芸大学・奈良女子大学・理・工（理2型）、生物環境【食物栄養以外】・九州工業大学・長崎大学【教育（中学文系）〈前〉、情報データ科学〈前後A〉以外】・札幌医科大学・会津大学・群馬県立県民健康科学大学・山梨県立大学・三重県立看護大学・京都市立芸術大学・大阪公立大学【医（リハビリ）〈前〉以外】・広島市立大学・山口県立大学・福岡県立大学
地理歴史・公民を課す際に『地理総合、歴史総合、公共』の選択を不可とする大学	旭川医科大学・医（医）・電気通信大学・東京大学・東京外国語大学・名古屋大学・大阪大学・神戸大学・奈良女子大学・文・工（歴公2型）、生物環境（食物栄養）・九州大学・長崎大学・教育（中学文系）〈前〉、情報データ科学〈前後A〉・大阪公立大学・医（リハビリ）〈前〉

※編集部で作成。詳細は各大学の発表資料をご覧ください。

理科

大学入学共通テスト、個別学力検査ともに、特筆すべき大きな変化はない。一部、25年度入試を機に、出題科目を見直す大学・学部があるので、自校の生徒に進学希望者が多い大学・学部の情報は、確認しておきたい。

例えば、宇都宮大学（地域デザイン学部建築都市デザイン学科）では、一般選抜前期・後期日程の大学入学共通テストにおいて、現行入試では、「物理」が必須で、「化学」「生物」「地学」から1科目を選択することになっているが、25年度入試では、「物理」「化学」「生物」「地学」から2科目の選択となる。また、三重大学（工学部建築学コース）では、一般選抜後期日程の大学入学共通テストにおいて、現行入試では、「物理」「化学」「生物」「地学」から2科目を選択するが、25年度入試では「物理」「化学」の指定となる。

数学

◎大学入学共通テスト

数学②における出題が『数学Ⅱ、数学B、数学C』のみとなり、「数学Ⅱ」単体での出題がなくなった。「数学B」の2項目（数列、統計的な推測）及び「数学C」の2項目（ベクトル、平面上の曲線と複素数平面）の計4項目から3項目を選択解答することとされ、試験時間は60分から70分に延びることになる。現行の大学入学共通テストでは、約5,000人もの受験生が「数学Ⅱ」を受験していたが、教育課程上「数学B」「数学C」を十分に学習できない生徒にとっては、志望校の選択肢が狭まることになる。

◎個別学力検査

国公立大学、私立大学の理系学部では、「数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・B・C」を出題科目とする大学・学部が多いが、基本的には現行入試と同じ重みだと考えてよい。ただし、現行入試において、「数学B」の3つの分野「確率分布と統計的な推測」「数列」「ベクトル」のうち、「数列」「ベクトル」を指定している大学の中で、25年度入試においては、「数学B」の「統計的な推測」を含むこととした大学もある。東京大学（理科一～三類）、東京学芸大学（A類・B類数学コース、E類情報教育コース）などが、それにあたる。

国公立大学の文系学部で個別学力検査に数学を課し、範囲を明示している大学については、「数学C」の「平面上の曲線と複素数平面」は出題範囲としないとしている。今後、募集要項等で詳細の確認が必要ではあるが、基本的に、文系学部では「平面上の曲線と複素数平面」は出題されないと考えてよいだろう。

一方、範囲を明示していない大学も多数あり、「数学B」の「統計的な推測」が出題範囲に含まれるのか今後の発表が待たれる。ただ、大学進学後、多くの大学で、文理を問わず「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を開講する動きが活発になっていることを考えると、「統計的な推測」は学習しておくべき分野だと言える。

図5 大学入学共通テストにおける「情報Ⅰ」の配点

大学名	方式	大学入学共通テスト配点			個別学力検査配点	配点合計
		共計	情報Ⅰ	備考		
会津大学	A	100	100	1教科1科目（理科、情報から1教科高得点採用）	500	600
	B	1000	100	6教科8科目（「情報Ⅰ」は必須）	500	1500
群馬県立県民健康科学大学 診療放射線学部	一般	700	100	4 or 5教科6科目（外国語、数学①、数学②必須）（国語、物理、化学、生物、「情報Ⅰ」から高得点の3科目を採用）	未公表	未公表
三重県立看護大学	前	550	50	6教科6科目（「情報Ⅰ」は必須）	220	770
	後	750	50		段階評価	750
京都市立芸術大学 美術学部	一般	500	100	美術、工芸：4教科4科目（国語、地理歴史・公民、外国語必須）（数学①、理科、情報から1科目選択） * 600点を500点に換算	未公表	未公表
		700	100	デザイン：5教科5科目（国語、地理歴史・公民、理科、外国語必須）（数学①、情報から1科目選択）		
		600	100	総合芸術：4教科4科目（国語、外国語必須）（地理歴史・公民、理科から1科目選択）（数学①、情報から1科目選択）		
京都市立芸術大学音楽学部 （作曲、指揮、音楽学）		600	200	3教科3科目（国語、外国語必須）（地理歴史・公民、数学①、数学②、情報から1科目選択）		

※編集部で作成。詳細は各大学の発表資料をご覧ください。

情報

◎大学入学共通テスト

試験時間は60分。国立大学の一般選抜においては、「情報Ⅰ」を選択科目とする大学・学部も一部あるが、必須で課す大学・学部が大半である。総合型選抜と学校推薦型選抜においては、「情報Ⅰ」を必須とする大学・学部が多いが、判断はそれぞれ異なるので、個別に確認が必要だ。

公立大学は、「情報Ⅰ」を必須で課す大学・学部もあるが、国立大学に比べて、選択科目とするか、または課さない大学・学部が多い。

私立大学は、公表した大学はまだわずかだが、「情報Ⅰ」を必須とする大学・学部はなく、一部が選択科目として利用するとしている。

なお、「情報Ⅰ」の配点について公表した大学の一部を、図5にまとめた。他教科・科目と比べて極端に配点が小さいということはない。

◎個別学力検査

課す大学・学部は、まだ見られない。

大学 インタビュー 1

青山学院大学

理念に掲げた人材像の育成に向けて、 一般選抜で記述・論述式問題を拡大

2021年度、思考力・判断力・表現力を測る一般選抜へと入試改革を断行。入学から卒業まで一貫した教育姿勢で、理念に掲げた「地球規模の視野」と「自ら問題を発見し解決する知恵と力」の育成を図る。

21年度、思考力・判断力・表現力を測る入試に一般選抜を改革

青山学院大学は、1996年、自学の理念を、「地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する」と明文化した。阪本浩学長は、「本学に入學してほしい学生についても、理念に掲げる育成を目指す人材像と一致している」と語る。

「高校生の皆さんには、高校時代から、人々の生活や社会について広く関心を持ち、自分が特に関心を持ったテーマを、主体的に突き詰めて学んでほしい」と思っています。さらに、学んだことをレポートやプレゼンテーションなどの形で

表現する活動にも、積極的に取り組むことを期待しています。物事を突き詰めたり、学んだことを表現したりする経験は、自分でテーマを設定して取り組む大学での研究において、必ず生きてきます」

同大学は21年度入試より、大学教育との接続を重視し、その適性を測るため、入試改革を行った。一般選抜（個別学部日程）で課す各科目において、受験者の思考力・判断力・表現力をより丁寧に測ろうと、記述・論述式問題を増やした。さらに、学部・学科によっては、多面的に思考力を測るために、教科横断型の総合問題を出題している。

「現在は、マークシート方式の一般選抜（全学部日程）も実施し

ています。この全学部日程と個別学部日程の関係については、今後さらに検討していきたいと考えています」

大学入学共通テストを利用する選抜方式では、23年度入試から、複数の学部・学科において、合否判定に利用できる科目数を、従来の3科目に加え、4〜6科目に増やした「新規科目型」を設ける。

「大学での学びを通じて、理念に掲げた『地球規模の視野』で物事を捉えられるようになるためには、高校時代に、基礎的な学力を文理の偏りなく身につける学習が大切だと考えます。そうした学習にしっかりと取り組んできた高校生を評価しようと、『新規科目型』を設定しました。合否判定に利

用できる科目数は、今後増やす方向で検討できればと考えています」

学校推薦型選抜や総合型選抜でも、受験者の思考力・判断力・表現力を評価することを重視している。「例えば面接で、海外留学先での学びを通じて広がった視野についてとうとうと話したり、小論文で、探究学習での経験を盛り込みながら論を展開したりするなど、自分なりの視点や問題意識を持っている高校生の、面接での発言や小論文の内容の質が高いです。華々しい成果のみを評価するのではなく、高校生がどんな活動をして、何を学んだのかをしっかりと見取った上で、合否を判断したいと考えています」

2025年度入試情報（*）

- ◎学校推薦型選抜や総合型選抜も含めて、基本的には現行の方針を継続。
- ◎大学入学共通テストを利用する方式や個別学力検査で、「情報Ⅰ」や「歴史総合」「地理総合」などを課すか検討中。2022年度内に公表予定。

* 2022年9月8日現在。



学長
阪本 浩
さかもと・ひろし
2019年12月から現職。

地理歴史科や情報科の科目を 25年度入試でどう課すか検討中

同大学が21年度入試より行った入試改革の目的と、新学習指導要領で目指すことは合致している。すなわち、新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、その評価だ。25年度入試も、学校推薦型選抜や総合型選抜を含めて、基本的には現行の方針を継続する予定だ。

ただ、大学入学共通テストを利用する選抜方式や、大学入学共通テストと個別学力検査を併用する選抜方式では、学部・学科によっては、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を必須科目や選択科目として新たに課す可能性があるという。また、「地理総合」「地理探究」「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」を、大学入学共通テストや個別学力検査でどのように課すかも、検討中だ。

「国立大学は、大学入学共通テストで『情報Ⅰ』を課すことを発表しましたが、高校現場では、情報科の指導ができる教師の確保に苦労しているという話を耳にします。他大学の動きとともに、高校現場の状況も考慮しながら、判断したいと考えています」

同大学では、遅くとも22年度中に、25年度入試の出題教科・科目を確定し、公表する予定だ。

リベラル・アーツ教育により、 多角的な視点を養う

同大学の理念は、リベラル・アーツ教育に力を注いできたことにおいても体现されている。

「問題の発見・解決に向けては、多角的な視点から物事を考え、判断することが求められます。そうしたことができるようになるためには、専門領域を深めることに加えて、リベラル・アーツを身につけることが非常に重要だと考えています」

同大学のリベラル・アーツ教育の柱となるのが、全学共通教育シ

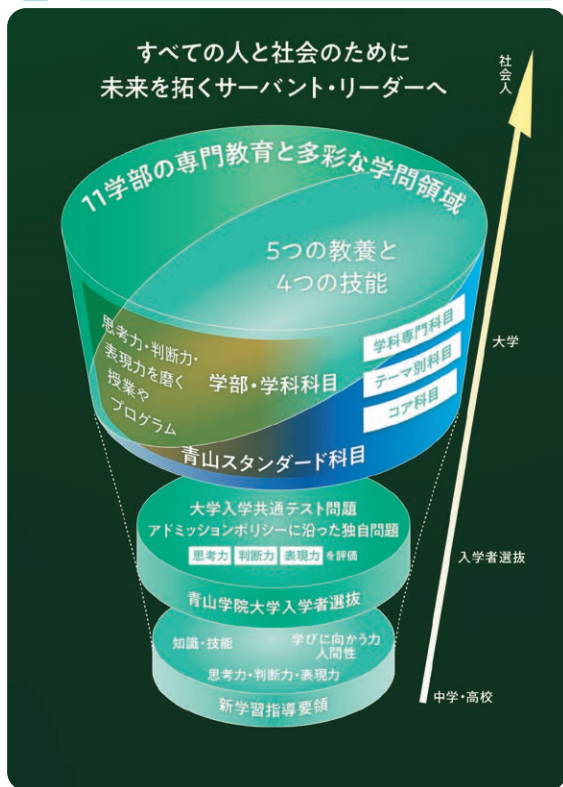
ステム「青山スタンダード」だ。学部・学科にかかわらず、一定範囲の知識・教養と、一定水準の技能・能力を備えることを目指す「青山スタンダード科目」を、全学年に設置。学生は専門科目と並行して、4年間を通して履修する。

「青山スタンダード」で重視しているのは、学生が自ら問いを立て、仲間との対話を通じて思考力・判断力・表現力を磨く活動を多く行うことだ。例えば、1年次の選択科目「フレッシシャーズ・セミナー」は、異なる学部・学科の学

生約20人の少人数クラスで構成され、教員と学生、学生同士の対話を重視するゼミ形式で行われる。専門性が異なる学生が意見を出し合うことで、視点を増やし、異分野の他者に自分の意見を分かりやすく伝える表現力を磨く。

「広い視野や主体的に学ぶ力などは、本学が入学生に求めているものであり、本学でさらに磨くことを目指しています。入学から卒業まで、首尾一貫した教育姿勢によって、本学の理念を具現化しているのです（図）」

図 青山学院大学の高大接続改革の概念



※大学資料をそのまま掲載。

大学 インタビュー 2

大阪大学

研究に取り組む上で必要な資質・能力を明らかにし、 社会課題に挑む人材の育成を目指す

社会課題に挑戦する人材の輩出を重点戦略に掲げる大阪大学は、多様な観点での入学選抜を実施。入学後は学生の成長を可視化し、資質・能力を伸ばす体制を構築している。

教科学習では、
自ら答えを導き出す経験を

大阪大学は、2022年1月に、中長期的な経営ビジョンである「OU (Osaka University) マスタープラン2027」(図)を取りまとめた。そこでは、「未来の様々な社会課題に挑戦する力強い人材」の輩出を重点戦略に掲げている。豊田岐聡副学長は、「本学には、我々が持つ『知性』、『英知』を結集して社会との共創を活性化させ、社会を変革する力を生み出すことが期待されている。そのため、好奇心と試行錯誤する力を備えた学生を求めている」と語る。

課題を発見し、試行錯誤しながら答えを導き出す経験は、特別な

活動に参加しなくても、高校の教科学習や特別活動で積むことができると、豊田副学長は強調する。

「例えば、数学の問題の中には、解法が1つではなく、複数存在するものがあります。すべての解法を丸暗記して入試を乗り切る受験生も少なくないですが、それでは大学入学後、太刀打ちできない問いに幾つも出合うでしょう。途中でつまずいたら、別のアプローチに挑戦し、よりよい解法を見つける。高校生の皆さんには、そのように粘り強く試行錯誤する経験を、普段の教科学習などの中で積んでほしいと思っています」

粘り強く取り組む原動力は「好奇心」だと、豊田副学長は述べる。「私が子どもの頃は、時計やテ

レビを分解するなど、不思議だなと思ったことは、何でも自分の手で調べてみるのがあたり前でした。今は、スマートフォンなどで調べれば、すぐに答えが見つかるため、自分で考え抜く力が不足し、研究を主体的に進められない学生が増えていると感じます。実験に何度も挑戦し、仮説通りの結果が出なくても、粘り強く取り組めるよう、普段の生活においても好奇心を大切にし、答えが1つではない問いに向き合う時間を大切にしたいと思っています」

同大学では、アドミッション・ポリシーとして、「確かな基礎学力及び主体的に学ぶ態度を有し、自ら課題を発見し探究しようとする意欲に溢れる人を受け入れる」

と掲げている。

そのような学生を、多様な観点で適正に選抜するため、17年度入試より、推薦入試(現学校推薦型選抜)とAO入試(現総合型選抜)を実施している。

また、17年度に推薦・AO入試で入学した学生が、4年間にわたってどのように成長したのかを、追跡調査した。その結果、推薦・AO入試で入学した学生は、一般入試(現一般選抜)で入学した学生と比べてGPA(※)が高く、4年次に行った指導教員による評価においても、「研究力」が高いことが明らかになった。

「指導教員には、『実験が仮説通りにいかなくても、諦めずに取り組むことができる』『課題・テ

2025年度入試情報(※)

◎文理関係なく、大学入学共通テストを課す選抜においては、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す。

* 2022年9月15日現在。

※ Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることができる。



副学長
豊田 岐聡
とよだ・みちさと
2018年4月から現職。

マに関して、事例や経験などから、法則性を見いだしたり、仮説を形成したりすることが『できる』など、研究に対する主体性を評価してもらいました。その結果、すべての項目で、推薦・AO入試で入学した学生の評価が一般入試で入学した学生の評価を上回っていました。学校推薦型選抜や総合型選抜では、高校時代にどのような課題にどう取り組み、何ができたようになったのかを、自分の言葉で語れるのかどうかを見るための面接や口頭試問を、25年度入試以降も引き続き、実施したいと考えています」

25年度入試では、全学部で共通テストの「情報Ⅰ」を課す

同大学では、22年5月に、新学習指導要領に対応した25年度大学入学者選抜における出題教科・科

目等を発表した。入学希望者に求める資質・能力は、現行の入試から変更はないが、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課すことにした。その理由を、豊田副学長は次のように述べる。

「今後は、文理関係なく、情報活用能力が必要になることは間違いありません。例えば、文系学部でも、膨大な資料から特定のキーワードを抽出する際は、データ分析のスキルが必要です。そのため、高校時代には、コンピューターの基礎やビッグデータを扱う素養を身につけておいてほしいと思っています」

コンピューターをツールとして活用する力を備えた高校生も多いが、「なぜ、コンピューターは動くのか?」「どのようにしてメモリに記憶しているのか?」などといったことにも興味を持ち、コンピューターの原理を学んでほしいと、豊田副学長は話す。

「情報の授業では、コンピューターの基本構成や動作の原理を理解してほしいと思います。そうした基礎知識を学び、仕組みを理解

することが、プログラミングやデータ分析を学ぶ土台となり、大学での研究に必要な高度な情報活用能力の修得につながります」

データを活用し、個別最適な学習を支援

「OUマスタープラン2027」では、単に「社会に貢献する」ということにとどまらず、一歩踏み込み、新たな「社会を創造していく大学」を目指し、各種教育環境の整備を進めている。

その1つが、22年4月に立ち上げられたStudent Life-Cycle Support System (SLiCS)だ。SLiCSは、データを基盤とした、個別最適学習・学生支援システム

の構築を目的としている。「本システムで

は、入学前から、卒業後の活躍までを見据えた学生のキャリアにかかわる情報やデータを蓄積、分析する予定です。その結果に基づいたフィードバックを、学生一人ひとりにすることで、個別最適な学習の支援を目指しています。そして、本学での教育成果を可視化することで、本学による社会への貢献を明らかにしていきたいと思っています」

図 OU マスタープラン2027の概要



※大学資料をそのまま掲載。

大学 インタビュー 3

九州工業大学

数理・データサイエンス・AIを、専門分野に 応用・活用できる技術者の育成を目指す

社会の問題解決に貢献し、新たな価値を生み出す技術者の育成を目指す九州工業大学。
総合型選抜では、他者と協働する際に鍵となる「書く力」と「話す力」を重視している。

「プログラミング的思考」と
「書く力」と「話す力」を重視

九州工業大学は、建学の理念として、「技術に堪能なる士君子」の養成を掲げ、技術に精通するとともに、道徳心も兼ね備えた技術者の育成を目指している。2022年度からは、「MDAS Hプログラム」(図)の下、数理・データサイエンス・AIの教育を積極的に推進し、それらの知識・技能を様々な専門分野に生かせる技術者の育成を開始した。

同プログラムへの接続も踏まえ、「プログラミング的思考」を備えた学生に入学してほしいと、安永卓生副学長は語る。

「小・中学校で学んだ『プログ

ラミング的思考』をより抽象化するとともに、情報や情報技術を活用して身近な問題を発見し、その解決策を考えるとといった経験を、高校生の皆さんには積んでほしいと思っています」

そうした経験を積むためには、「情報」を単一の教科として学ぶだけでなく、様々な教科・科目の内容と関連づけながら学ぶことが重要だと、安永副学長は述べる。

「例えば、情報で学ぶデータ分析の手法は、数学や理科だけでなく、地理歴史・公民でも役立ちます。コミュニケーションツールとして英語を様々な場面で活用するように、情報の授業で身につけた力も、他の教科・科目の学びで生かしてほしいと思っています。」

言うのも、大学での研究や企業での新規事業開発では、複数の学術分野を連携させながら問題解決に取り組む必要があるからです。高校時代には、他の教科・科目との連携が図りやすい情報や『総合的な探究の時間』での学習を通じて、問題解決に取り組む素地を養ってほしいと思っています」

また、同大学では近年、「未来思考キャンパス構想」を掲げ、キャンパスの中に、最先端のICTを駆使した施設の整備を進めている。その代表的な施設が、22年5月にオープンした、コワーキングスペース「GYMLABO」だ。学生が企業や他大学の人材と交流できる同施設を設置し、そこで他者と協働することで、よりよいア

イデアを創出できる学生を育成しようとしている。そのため、他者と協働する際に鍵となる「書く力」と「話す力」を、高校時代から鍛えてほしいと、安永副学長は語る。

「近年、大学のレポートなどで論理的な文章を書くことが苦手な学生が増えています。新学習指導要領で新たに設けられた『総合的な探究の時間』や『論理国語』などの科目を通じて、自分の考えを論理的かつ相手に的確に伝わる文章にまとめる経験を積み、『書く力』を鍛えた学生が入学してくれることを期待しています」

「話す力」は、協働的な学びを通じて磨いてほしいと語る。

「社会では、専門性とともにコミュニケーション力が求められま

2025年度入試情報(*)

◎一般選抜と総合型選抜Ⅱ、学校推薦型選抜Ⅱ(工学部のみ)で、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す。2022年度内に配点を公表予定。

* 2022年9月15日現在。



副学長
安永卓生
やすなが・たくお
2022年4月から現職。

す。仲間との協働によって思考が深まり、よい取り組みができたと思える経験を多く積んでほしいと思っています」(安永副学長)

そうしたアウトプット力を向上させるためには、自身の学びを振り返る機会を充実させることが重要だと、安永副学長は説明する。

「高校生の皆さんには、授業や小テスト、單元ごとの振り返りを大切にしてほしいです。自分の学習をメタ認知する習慣をつけることで、自分の課題に気づき、それを次の学びへとつなげていくことができるからです」

総合型選抜Ⅰ・Ⅱでは、入学希望者の「書く力」と「話す力」を評価するため、レポートや問題解決型記述式問題を課しており、23年度入試でも継続する予定だ。問題解決型記述式問題は、小・中学校、高校で学ぶ理科や数学の内容をテーマにした、正解が1つとは

限らない問いについて、自分が考えた答えを論理的に記述する問題だ。加えて、グループディスカッションを行い、リーダーシップやフロワーシップなどの役割を果たせるかを評価する。

21年度入試からは、特別選抜の募集定員を3割までに増やしており、アウトプット力に長けた学生を選抜し、大学の核となる人材として育成したいと考えている。

入試科目に設定することで、情報教育の活性化に期待

同大学では、新学習指導要領に対応した25年度入試でも、基礎学力に加えて、先に掲げた資質・能力を備えた学生を受け入れるため、同様の選抜を実施予定である。

また、25年度入試の一般選抜と総合型選抜Ⅱ、学校推薦型選抜Ⅱ(工学部のみ)で、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す予定だ。

「入試科目になることで、高校の情報教育が活性化することを期待しています。特に本学では、情報科の教員を養成しているため、

力のある高校生が本学に入学し、将来的には、地域の学校で教員として活躍してほしいと思っています。配点については検討中ですが、22年度内には発表予定です」

データサイエンスやAIを学び、研究へ応用する力を

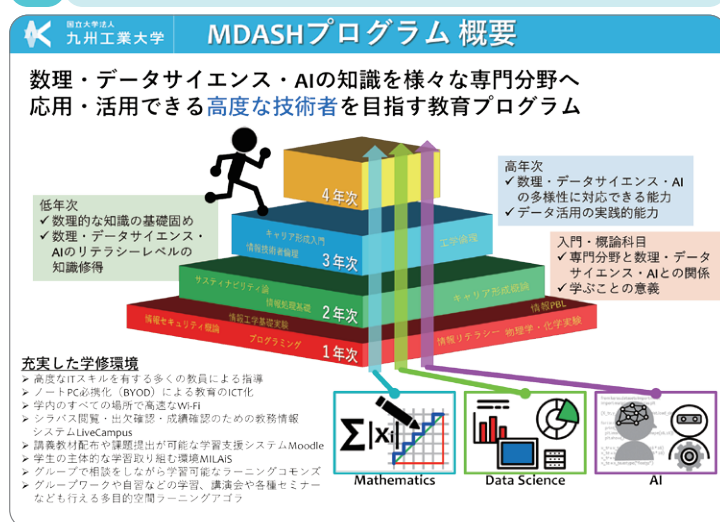
同大学は入学後も、「プログラミング的思考」や「書く力と話す力」を鍛える教育を行っている。その1つが、「MDASHプログラム」だ(図)。

数理的な基礎知識や数理・データサイエンス・AIのリテラシーレベルの知識を修得後、実践的な演習や実験科目の履修を通して、それらの知識・技能を様々な専門分野へ活用できる能力を育成することを

目指している。

「高年次になるに連れて、学生が主体となって、答えが1つではない課題に取り組めるプログラムにしています。同プログラムなどを通じて、社会の問題解決に貢献し、新たな価値を生み出すことができる技術者を育成していきたいと考えています」

図 MDASH プログラム 概要



※大学資料をそのまま掲載。

大学 インタビュー 4

佐賀大学

入学後の学生の活躍ぶりを踏まえて、高校での自主的な活動を重視した入学者選抜を実施

佐賀大学は、一般選抜で「特色加点制度」を設けるなど、高校での自主的な活動を重視した入試を行ってきた。そうした入試を経た学生は、大学でも大きく伸びているため、今後も現状の入試を維持する方針だ。

高校時代の活動を評価する 特色加点制度を、一般選抜で導入

佐賀大学は、一般選抜で、高校時代の活動を評価する「特色加点制度」を導入している。活動の内容及び活動とアドミSSION・ポリシーや大学入学後の学びとの関連を、それぞれ400字以内で記述した書類を提出すると、大学入学共通テストと個別学力検査の合計点とは別に、内容に応じて加点される(図)。書類の提出は任意で、「任意であっても提出しよう」という姿勢自体に主体性があると考え、評価している。実際、大学入学後のGPAやアンケート調査の結果を見ると、教科学力だけでなく、リーダーシップや自律性など

の資質・能力も、同制度を利用した学生は高い傾向だと言う。

ただ、高校時代の活動を入試で適切に評価するためには、学校推薦型選抜や総合型選抜で行う面接や口頭試問、書類審査、適性検査の精度を上げるべきだと、西郡大副学長は説明する。

「志望理由に加え、提出書類の内容を深める質問をするなど、面接を行う学部・学科が、その生徒ならではの回答を引き出すような問い方を工夫することが必要です」

また、入試では、生徒が活動に自主的に取り組んできたかを最も重視して見ている。入試に有利だから、教師に言われたからといった理由で活動に取り組んでも、生徒の力にならないと考えている。

「面接で高校での活動について聞くと、自主的に取り組んできた生徒は、伝えたいたい思いが強く、どんな言葉が出てきま

す。一方、受動的に取り組んできた生徒は、準備した内容しか話せず、突っ込んだ質問をされると、言葉に窮します」

大学の授業で課すレポートも、高校で自主的に探究学習などに取り組みできた学生は、自分なりの解

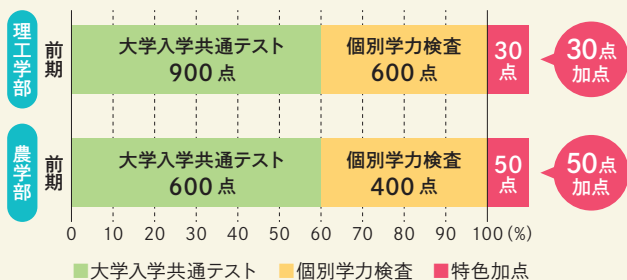
決策まで書くことができる。そして、低学年次からそうしたレポートが書ける学生は、踏み込んだ卒業研

図 特色加点制度の概要

◎申請できる活動実績の例

- 研究活動(探究型学習、課題研究、各種教育プログラムなど)
- 課外活動(部活動や生徒会活動など)
- 学校行事(担当した役割など)
- 社会活動(ボランティア、地域活動など)
- 資格・検定取得
- 海外留学経験
- 大会・コンテスト(実績など)
- その他主体的な活動(個人的な取り組みも可)

◎2023年度一般選抜の加点例(理工学部・農学部の場合)



※大学の提供資料を基に編集部で作成。

2025年度入試情報(*)

- ◎学校推薦型選抜や総合型選抜も含めて、基本的には現行の方針を継続。
- ◎大学入学共通テストを課す選抜においては、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す。2022年度内に、配点などを公表予定。

* 2022年9月13日現在。



副学長、人文・社会科学域
教育学系教授
西郡 大
にしごり・だい
2022年4月から副学長。

究に挑戦する傾向があると言う。

「探究学習などについては、入試を意識して奇麗な結論にこだわりの過ぎた取り組みは、必ずしもよい評価とはなりません。結果・成果だけではなく、何に関心があり、問題解決のためにどのような試行錯誤をし、失敗も含めてそこから何を学び、それを踏まえて大学で何をしたのかを、明確に言語化することが重要です」

現在は、早期合格者にとって魅力的な入学前教育を検討中だ。学校推薦型・総合型選抜の合格者には、入学前に新しい学びに挑戦してほしいと、西郡副学長は語る。

「受験勉強中は学びへの意欲が高く、入学後の学びを具体的に描いていると思います。ところが、合格すると安心してしまい、学習が続かなくなる生徒が少なくありません。入学までの時間を使って大学で挑戦したいことを改めて考え

たり、その準備に取り組んだりすることで、入学後によりスタートを切ってほしいですし、ほかの学生により刺激を与える存在になってくれることを期待しています」

新設科目を中心に、従来の方向性でよいかを検討中

同大学は、2025年度入試について、大学入学共通テストでは「情報Ⅰ」を必須で課すこと（一部学部は選択）を始め、新学習指導要領で新設された科目の出題範囲について公表した。22年度内には、配点なども公表する予定だ。

「大学入学共通テストの利用に関する検討では、数学の出題範囲の拡大による受験生の負担への配慮や、高校における情報科の指導体制の現状を考慮し、『情報Ⅰ』の配点は当面大きくできないのではないかという意見が出ました。今後、配点や科目選択の方法などについての議論を重ね、適宜公表します。個別学力検査については、新学習指導要領の内容を精査し、どのような方針で出題すべきかを

慎重に検討しています」

新学習指導要領の実施による、新たな入試の導入の予定はない。これまでも、探究的なものの見方や考え方、学びに向かう力などの評価を重視した入試を行っており、求める人材を選抜することができていると考えているからだ。

「入試を変えるのであれば、本学の学生として身につけるべき力を育成するための教育改革とともに行うべきでしょう。GPAやアンケート調査の結果などから、高校時代の活動と学生の成長の関係や、一連のカリキュラムによる学生の成長を継続的に見取り、それを入試に反映していきたいと考えています」

リベラル・アーツ教育で学び続ける力を養う

同大学は、学士課程で身につけるべき資質・能力を、「基礎的な知識と技能」「課題発見・解決能力」「個人と社会の持続的発展を支える力」の3項目から成る「佐賀大学学士力」と定めている。それを

基に、各学部がカリキュラムを設計し、教育の質保証を図っている。

さらに、10年先を見据え、リベラル・アーツ教育を重視している。その1つが、1コース8単位で構成される「インターフェース科目」だ。「環境」「地域・佐賀学」などの7コースから1つを履修する。複数の分野を横断的に学ぶことで、視野を広げ、自分ならではの発想ができるようになることがねらいだ。また、同科目での学びを専門科目に生かせるよう、同科目は2年次後期と3年次に配置されている。21年度に始めた「キャリア・アクセラレーションプログラム」は、社会人基礎力の育成と、キャリアデザインの明確化をねらいとしており、学生は、企業と仕事について語り合ったり、協働で創作活動を行ったりする。

「人生100年時代と言われる中、必要なのは『学び続ける力』です。大学卒業後も自分の課題意識や興味・関心に沿って学びを深めたり、広げたりするための土台となる、豊かな教養の育成に力を入れていきます」

2025年度大学入試に向けた高校の検討課題

各大学が公表する2025年度入試に関する情報を受け、高校はどのような観点で、今後自校が取り組むべき課題を検討すればよいのか。ここでは、検討の観点について考えた上で、その観点において取り組むべき課題に先進的に着手した2つの高校の事例を紹介する。

観点①

教育課程や教育活動の見直し

大学からの入試科目の公表後、すぐに動き出せるよう、現時点での情報で対応を検討

2025年度入試に向けて、どのような指導をしていけばよいのか、各大学が公表した22年9月時点の25年度入試の情報から、今後、各校で検討すべき事項を図1に整理した。

最も影響が大きいのは、現高校1年生だ。志望校の受験に必要な科目が履修できるようになっているか、出題内容をカバーできる指導計画となっているかを確認したい。また、入試制度の変更は、経過措置科目や出願動向の面で現高校2年生にも影響があるため、24

年度入試での対応が求められる。さらに、25年度入試の出題科目が明らかになった後は、23年度に入学する現中学3年必生以降の学年で、どのような教育課程を編成するのか検討が必要になるだろう。

最終的な判断は、23年3月にすべての大学が25年度入試の出題科目を公表し終えてからとなるだろうが、図1の学年別のチェックポイントに沿って校内での検討を進め、対応を想定しておくことで、情報が出そろった時に、すぐに動き出せるようにしておきたい。

観点②

探究学習と総合型・学校推薦型選抜

探究学習で深めたことと、大学で学びたいことの一致点を探る指導を

総合型・学校推薦型選抜を受験する場合、図2のように、様々な対応を早期化する必要がある。2年次3学期を「3年次0学期」として一般選抜に向けたスタートを切るのと同様に、2年次11月頃に総合型・学校推薦型選抜を生徒に意識させるとよいだろう。例えば、志望する選抜方式にかかわらず、2年生全員が志望理由書を書くことを、受験への意識を高める機会とする高校も増えている。

P.5で示した通り、「探究型の入試」が拡大傾向にある中、探究

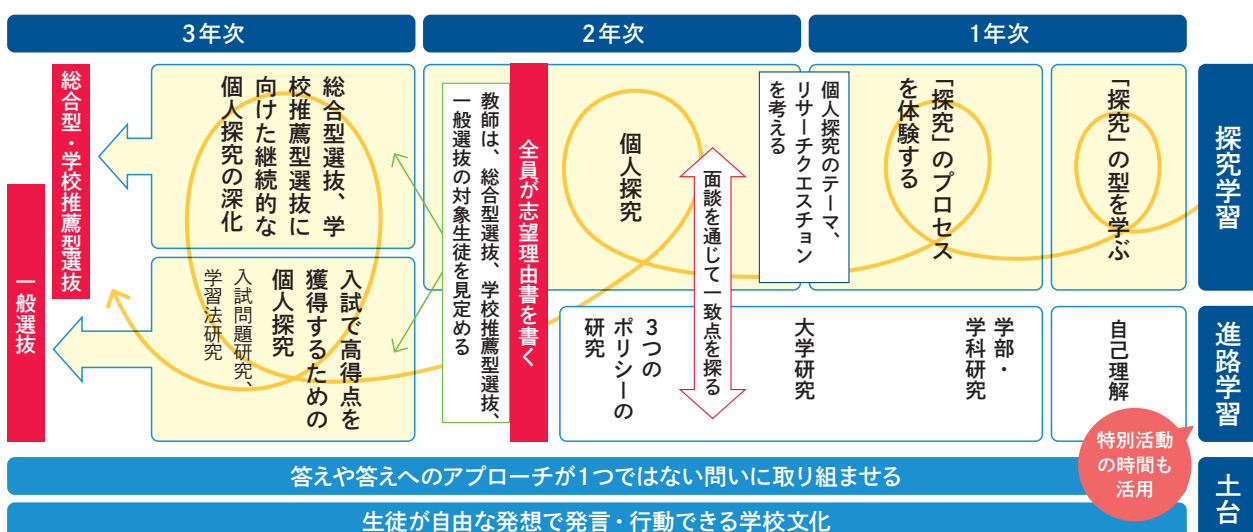
学習で深めてきたことが、志望校で学びたいことと合致すると、充実した志望理由書を書くことができる。1年次から探究のプロセスを繰り返し経験し、2年次には、自身の探究学習が大学で学びたいことにどうつながるのか、面談などで教師が示唆を与え、探究学習と進路の一致点を探っていく。また、探究を深める土台となる、答えや答えへのアプローチが1つではない問いに取り組みさせる授業や、生徒が主体的に活動できる学校文化を築くことも重要だ。

図1 2025年度大学入試に向けた学年別のチェックポイント

現高校2年生	☑ 経過措置科目『旧情報（仮）』の試作問題の校内実施 大学入試センターは、22年11月9日をめどに、『旧情報（仮）』の試作問題を配点とともに公表する。国公立大学志望者が、仮に高校卒業後に再度大学を受験することになった場合、多くは『旧情報（仮）』を受験しなければならない。1・2年次に情報を履修している場合、2年次の段階で、どの程度得点できるのかを確認しておきたい。本人が大丈夫と思えば、それでよく、難しいと不安になっていたら、現役合格への後押しになる。 ☑ 高い志望の堅持 入試制度が変更される前年は、過去のデータから、例外なく安全志向になり、志望校の難易度を下げる生徒が増えることが分かっている。志望校別に集会などを行い、志望校への揺るぎのない思いを醸成しておきたい。
現高校1年生	☑ 教育課程や指導計画の点検 生徒が志望校を受験できない教育課程になっていないか、また、3年次に配置されていることが多い学校設定科目で具体的に何を指導するのか、次の観点で点検しておきたい。（詳細はP.6～7参照） 【地理歴史・公民】 - 大学入学共通テスト『地理総合、歴史総合、公共（から2科目）』で受験できない大学・学部は少なくない。『公共、倫理』『公共、政治・経済』であれば、ほぼ全大学への対応が可能になりそうのため、特に理系の3年次に「倫理」「政治・経済」が設置されていれば、入試科目として利用しやすくなる。 【数学】 - 文系・理系とも、個別学力検査において、「数学B」の「統計的な推測」の出題を想定した指導計画が必要だ。一方、文系における「数学C」の「平面上の曲線と複素数平面」は、学習していなくても受験に支障がないと考えてよいだろう。 「数学A」「数学B」「数学C」の出題範囲を明示していない大学が多い。「数学A」の「数学と人間の活動」、「数学B」の「数学と社会生活」、「数学C」の「数学的な表現の工夫」の指導に悩むところだが、少なくとも「数学A」の「数学と人間の活動」には、整数の約数や倍数、ユークリッドの互除法、二進法等が含まれるので、学習しておくのが望ましい。 - これまでの大学入学共通テストで「数学Ⅱ」を受験する生徒が多かった高校では、『数学Ⅱ、数学B、数学C』の受験が可能な教育課程になっているか、確認が必要。 【情報】 3年次に何かしらの形で対応することになると思われるが、担当できる教師がいなかった学校もある。対応を必要とする生徒数、指導可能な教師数を踏まえて、教育課程内で対応できるのか、補習などで対応するのか、教材は何を使用するのか、どのように進めるのかを検討しておきたい。場合によっては、生徒同士が学び合う体制づくりも考えたい。 ☑ 2年次の科目選択に向けて（理系） 25年度入試で、大学入学共通テスト及び個別学力検査の理科の科目指定を変更する大学がある。志望校が明確な生徒には、現行入試の出題科目で判断せず、志望校が25年度入試の出題科目を公表したかどうかを自ら確認させて、判断するよう指導する。23年3月まで、すなわち、校内の選択科目決定時期までに公表しない大学もあり得るため、柔軟な対応ができるようにしておきたい。 ☑ 大学入学共通テスト試作問題の研究 大学入試センターは、22年11月9日をめどに、地理歴史、公民、数学、情報について、各出題科目の全体の構成が分かる試作問題を配点とともに公表する。試作問題の傾向を定期考査等に取り入れられるよう、各教科で研究を進めたい。1年次の履修科目については、部分的にでも、試作問題に取り組みせるとよいだろう。
2023年度入学生 （現中学3年生） 以降	☑ 教育課程の見直し 教育課程は既に決定しているだろうが、上記の現高校1年生のチェックポイントに照らして、可能な限り安定した教育課程の編成を検討したい。

※編集部で作成。

図2 3年間の探究学習と進路学習の進め方（例）



※編集部で作成。

高校 実践事例 1

観点① 教育課程や教育活動の見直し

生徒主体で学び方を学ぶ、週1コマの「学びの アセスメント」で、生徒の自己調整力を高める 京都府・京都市立堀川高校

2022年度入学生から、生徒同士が学び方や学びのあり方について語り合う「学びのアセスメント」を、1年次に始めた。3年次には、自己調整しながら学習を進められるようになっていくことが目標だ。

自分で学ぶ力を育み、自らデザインした学びを実践できるように

『自立する18歳』の育成』を最高目標に掲げる京都府・京都市立堀川高校は、2022年度入学生教育課程も、その目標の下で編成した。科目や内容の扱いに大きな変更があった国語科、地理歴史・公民科、数学科、情報科に関する情報を、校内で研修会を実施し共有した上で、各教科での対応を検討。例えば、「数学C」が大学入学共通テストの出題範囲となることも想定し、3年次に学校設定科目「数学演習」を設定した。また、授業時数は、これまでの週35単位時間

から、学習指導要領の総則に示された「週当たりの授業時数は、30単位時間を標準」を基準に検討した。

教育課程の編成過程では、学習の自己調整力をどのようにして育成するのかも検討した。飯澤功^{いゐざわ いくお}教頭は、次のように説明する。

「1年次から生徒主体で探究学習や学校行事を行うことで、3年次には、自ら計画を立て、問題を解決しながら、活動を進めることができるようになります。ただ、そうした自己調整力を教科学習に生かし切れず、学力が伸び悩む生徒が少なくありませんでした。そこで、教科学習における学び方を学ぶ『学びのアセスメント』を、

1年次に設けることにしました」

検討の結果、1年次の総単位数は33単位とし、教育課程外に「学びのアセスメント」(図1)を週1コマ配置。2年次の総単位数は33単位、3年次は31単位で編成し、毎日7限まで授業を行っていたこれまでの教育課程に比べ、生徒が自分の望む学習をできる環境を整えた。

また、各大学の、25年度入試で課す教科・科目等に関する情報の公表を受け、校内で対応を協議。「情報I」については、22年11月に公表される大学入学共通テストのサンプル問題を踏まえて、3年次の夏季休業中の補習実施など、詳細を検討する予定だ。地理歴史・公民

学校概要

設立 1908 (明治41) 年

形態 全日制/普通科・人間探究科・自然探究科/共学

生徒数 1学年240人

2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、京都府立医科大、京都府立大、大阪公立大などに131人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ299人が合格。

副校長 中村陸子
なかむら りんこ
教職歴33年。同校に赴任して13年目。

教頭 飯澤 功
いゐざわ いくお
教職歴18年。同校に赴任して19年目。

進路指導主事・企画推進部長 滝本梨恵子
たきもと りえこ
教職歴18年。同校に赴任して13年目。理科(化学)。

1学年主任 飯島弘一郎
いゐじま こういちろう
教職歴10年。同校に赴任して6年目。国語科。

科は、大学入学共通テストで「公共」と「政治・経済」または「公共」と「倫理」を選択できる大学が想定より多かったため、「歴史総合」及び

図1 「学びのアセスメント」概要

- ◎目的 ①個人として、自分自身の学びを振り返り、学習方法を自己調整する。
②クラスとして、高みを目指し、学び合う学習集団をつくる。
- ◎実施日・時数 毎週金曜日の4時間目、年間26時間（予定）※教育課程外
- ◎実施教科・時数 国語科（年間10時間）、数学科（年間4時間）、英語科（年間10時間）、地理歴史・公民科（年間2時間）
- ◎進め方 使用する資料やプリントなどは、教師が用意。各クラスの教科係の生徒と担当教師が事前に打ち合わせをし、資料配布や説明などを行う進行役は、教科係が務める。



「学びのアセスメント」は生徒のみで進行。教師は、教室には入らず、廊下から見守る。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 「学びのアセスメント」年間計画（抜粋）

カリキュラム・ポリシーより（1年次）

学習姿勢：目標と目的を意識し、調整しながら謙虚に学ぶ。
なれる：謙虚に学ぶ姿勢を持ち、作法を身につける。
たのしむ：他者とかわかり、見聞を広め、知性を育む。

	学年の様子	実施教科	学びのアセスメントで 確認したいこと／気づかせたいこと	
4月	■探究 DIVE ＝学問的興味を刺激し、学びに向かう意欲を喚起 ■課題テスト、キャリアパスポート ■第1回学習状況連絡会（入学時の学力／学習状況の確認）	※セルフチェックシートを用いて時間割に合わせた平常授業の予習・復習サイクルを確立する。 初期に標準を上げておくことが大切 ※振り返りの質についてチェック。 後期に入るまでに振り返りの質を上げていきたい （コメント／クラスでよいものを紹介するなど、教科担当者・担任の二人三脚でありたい） ※現時点での自分の強み・弱みだと思っていることを言語化しておく。	4/22 国語	- やればできるはずのことができているか認識する。 - 自身に定着するためにかかる時間や方法を認識する。 - 自分なりに計画を立てて臨み、うまくいった点、不十分だった点を言語化し、調整しながら学ぶことの意義を認識する。 - 自身の学習スタイル（予習、授業、復習への向かい方）を見直し、友達を真似てみようと感じる経験をする。 ＝学習スタイルのよい生徒を教科担当者として担任で共有したい。
5月	■スタサポ返却 ＝学力GTZに対し、学習習慣がどうか確認	※高校で初めての定期考査である前期中間考査へ自分なりに工夫して全力で臨んだ結果、どうだったかを考えることが大切になるので、まずは全力で向かうよう促す。	5/2 英語 5/13 数学	

同校では、「学年の様子」として、学校行事やLHR、模擬試験などに結びつけて、生徒の目指す姿を学年・月ごとに示している。それを踏まえて、「学びのアセスメント」で行うことを、右欄の「学びのアセスメントで確認したいこと／気づかせたいこと」として明記。各教科担当者は、それを基に、「学びのアセスメント」の自教科の年間計画を立てた。

※学校資料を基に編集部で作成。

図3 「学びのアセスメント」国語科の実施内容（抜粋）

- ポイント
- 「言語文化」の確認の時間とする。
 - 学習の展開に合わせて、次の3ステップを繰り返し、らせん状に発展させる。
①基礎事項の徹底 ②ノートづくりを軸にした予習・復習の質の向上 ③『言語文化』を学ぶ意味を理解した上で、自ら問いを立て、相互に深める
 - この時間のための事前学習は必要ないようにする（教科係主体で進めるため、全く準備をしていない生徒がいたとしても、その時間を運営できることが必須要件）

	確認したい項目	内容
第1回（4月）	- やればできるはずのことができているか認識する。 - 自身に定着するためにかかる時間や方法を認識する。 - 自分なりに計画を立てて臨み、うまくいった点、不十分だった点を言語化し、調整しながら学ぶことの意義を認識する。	【サイクルⅠ・ステップⅠ】①授業内容に準ずる小テスト（文法・単語等）を実施、②各自で採点した後、成果と課題を整理し、改善策を考える、③振り返りの結果をグループで共有、④個人で気づいたことをまとめる

※学校資料を基に編集部で作成。

「地理総合」を受験科目とする基本方針を確認しつつ、3年次の選択科目について改めて検討している。

他者との対話から、自分にとってのよりよい学びを探る

同校にとって新たな活動となる「学びのアセスメント」の目標は、3年次までに、生徒が自分に必要

な学び方を自分で選び、学びを進められるようになることだ。その目標から逆算し、1年次のうちにできるようになってほしいことをイメージして年間計画（図2）を立て、それを基に、各教科が具体的な活動計画を作成した（図3）。実施教科は、全教科の学習の土台となる国語・数学・英語で、毎時間1教科とした。また、2年次の科

目登録に向けて、生徒に学ぶ意義を深く感じてほしいと考えた地理歴史・公民もスポットで実施した。4月に実施した1回目は国語で、古文文法の小テストの結果から、個人で学習を振り返った後、グループで教え合いや、学習方法・動機づけの方法に関する意見交換を行った（図3）。他教科も同様の進め方で、他者の学び方や学びに對

する考えを聞くことで、自分にとってのよりよい学びを探っていく。

「学びのアセスメント」の進行役は、教科係の生徒が務める。各教科の教師から、事前にその時間の目標や大まかな流れについて指導を受けた後、教科係は、資料配布や説明の仕方、まとめの内容など、クラスに合った方法を考える。当日、教師は廊下から見守り、気づいた

点は、終了後に教科係に伝えるとともに、次の活動計画に生かす。1学年主任の飯島弘一郎先生は、教科係が重要な役割を担うと語る。

「活動の雰囲気づくりも、教科係が担っています。年度初めに教科係を決める際、その教科の成績が優秀でなくても、その教科が好きで、クラス全員でその教科の学習を深めていこうとする意欲のある生徒に教科係を務めてほしいと伝え、実際、そのような生徒が就きました。前期は、教師が準備をしていましたが、後期は、教科係に徐々に任せていく予定です」

「分らない」と言える、点数に一喜一憂しない生徒

「学びのアクセスメント」が始まって半年。生徒の学び方は変化しつつある。6月の調査では、自ら数学の予習をしてくる生徒が、例年に比べて多かった。「学びのアクセスメント」で学び方を学ぶ中で、予習の重要性に気づいたのではないかと、進路指導主事の滝本梨恵子先生は語る。学び合う集団づくりも、

例年より早く進んでいるという。

「1年生のうちは、中学校時代からの小さなプライドがあり、『分らない』となかなか言えないのですが、『学びのアクセスメント』の時間に、分からない問題をじっくり教え合う経験をしているからか、クラス内で質問し合える関係が築かれつつあります。『分らない』と言い合えるムードを、生徒自身も喜びと受け止め始めています」

中村陸子副校長は、1年次前期の中間考査後の生徒の様子に、これまでとの違いを感じた。

「入学後初の考査では例年、点数のみを見て一喜一憂する生徒が大半ですが、今年度はそうした生徒が少なかったようです。『学びのアクセスメント』を通じて、考査は、できなかった点を把握し、学び方を振り返る機会だと、理解しようとする姿勢が見られます。そうした理解が今からあれば、2年次以降、模擬試験なども十分活用することができると、期待ができます」

「学びのアクセスメント」の効果検証と改善は、毎時間記入する振り返りシートや、授業アンケート

を基に行う予定だ。振り返りシートは、年度初めの記入内容と比較して、学習の悩みを具体的に把握することができるようになったか、自分で解決策を考えられるようになったかなどを見取り、その結果を生徒にフィードバックする形成的評価にも生かしていく。

すべての学びの言語化により「自立する18歳」に向かう

22年度入学生教育課程では、探究学習に関する科目を増やした。1年次には、前期の「総合的な探究の時間」で、生徒が自分の関心をじっくり掘り下げ、自身で解決したい課題を見いだす機会を設けた。旧課程のその時間を実施していた探究手法の学習は、「理数探究基礎」を新設して行うことにした(図4)。2年次は、前期のみだった「総合的な探究の時間」を通年で設け、後期は、前期に取り組んだ個人探究を続けたり、チームで探究したりする時間として、探究のさらなる深化を目指す。

「教科学習、探究学習、学校行

図4 1年次の探究学習に関する科目の構成

	1年生 入学直後	前期	後期
探究「総合的な探究の時間」	探究 DIVE 入学後、丸2日間、どっぷり探究につかる。一見、手の出しようのない「問い」に「朋」とともに手と頭を使って答えを導き出していく。	探究基礎 HOP 自分自身の問題意識や興味を深める期間。探究の「愉しさ」を満喫しつつ、探究という営みが様々な場面で役に立つことを実感する。課題設定の方法について学ぶ。	探究基礎 STEP 自分の興味のある分野の少人数講座に所属し、具体的な課題の解決に向け、研究計画という戦術を立てられるようになるための期間。「常識」を「朋」と議論する。
「理数」		理数探究基礎 理数的な探究活動を複数回行うことで、探究の「型」(仮説実証の方法、研究倫理、数学・理科で学んだことの探究への応用)を身につける。国語力や論理的思考力も育成。文系を志望する生徒も、物理等の考え方を理解できるようにする。	

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

事等のすべての活動で、なぜ学び、どう試行錯誤して成長してきたのかを、生徒が言語化できるようにすることが、『自立する18歳』に向かう基礎となり、25年度大学入試を始めとするこれからの大学入試で求められる資質・能力の育成にも結実すると考えています」(中村副校長)

高校 実践事例 2

観点② 探究学習と総合型・学校推薦型選抜

探究の重要な要素を「探究の思考」に整理。
希望進路の実現につながる力を育む

山形県立山形北高校

探究学習に力を入れてきた結果、総合型・学校推薦型選抜での合格者の割合は、年々増加。その手応えから、生徒の資質・能力をさらに育もうと、22年度は、探究学習の改善を図った。

生徒の成長を目のあたりにし、
探究学習の重要性に気づく

2022年度大学入試において、山形県立山形北高校では、国立大学・公立大学の合格者数に占める総合型・学校推薦型選抜での合格者数の割合が約65%と、例年の約50%を上回った。その大きな要因は、1

年次から取り組んできた探究学習にあると、19年度入学生生主の学年主任を務めた鈴木佳徳先生は語る。

「生徒は1・2年次に、『自分で課題を設定↓情報収集↓整理・分析↓まとめ・表現』といった、いわゆる探究のサイクルを経験してきました。その中で、『探究の思考』

(P.22図1)を身につけた生徒は、志望理由書や面接練習で、大学・学部・学科の志望理由を、自分の学びを踏まえ、自分の言葉で語れるようになっていました。そのような生徒が大学入試で評価されたのだと捉えています」

同校が探究学習に力を入れ始めたのは、18年度のことだ。それまで学年主導だった「総合的な学習の時間」の運営を学校主導に切り換え、学年ごとに異なっていた活動内容を学校全体で統一し、1年次から探究学習に取り組むことにした。進路課主任の大内清輝先生は、その理由を次のように語る。

「今後増えていくであろう大学

入試における多面的・総合的評価には、単に教科学力を上げるだけでは対応し切れないのではないかとこの危機感がありました。志望理由書や調査書に書ける内容を増やさなければならぬと考え、着目したのが探究学習でした」

生徒の能力を伸ばしつつ、様々な入試に対応できるようにと始めた探究学習だったが、自分が探究した課題にもっと深く取り組める大学・学部はどこかといった視点で志望校を選ぶようになるなど、生徒の成長を目のあたりにし、生徒にとって探究学習は重要な学びであることを再認識したという。

「医療分野への進学を迷ってい

学校概要

設立 1928 (昭和3) 年

形態 全日制/普通科(女子校)・音楽科(共学)
生徒数 1学年200人

2022年度入試合格実績(現役のみ)

国立大学は、北海道教育大、宮城教育大、山形大、福島大、東京藝術大、新潟大、山形県立保健医療大、山形県立米沢栄養大などに70人が合格。私立大は、東北学院大、東北芸術工科大、東北福祉大、宮城学院女子大、東北文教大、法政大、武蔵野音楽大、洗足学園音楽大などに延べ163人が合格。



進路課主任
大内清輝

おおうち・きよてる
教職歴22年。同校に赴任して6年目。国語科。



1学年主任
鈴木佳徳

すずき・よしのり
教職歴34年。同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。



教務課
柴田勝将

しばた・かつまさ
教職歴6年。同校に赴任して6年目。理科(化学)。

たある生徒は、3年生の時に、自ら医療従事者に連絡を取り、仕事のやりがいや現場の課題についての話を聞き、自分のそれまでの学びや培ってきた資質・能力と照らし合わせた上で、最終的に看護学部への進学を決めました。探究

学習で身につけた『探究の思考』を、自分の進路実現に生かしたのです。探究した分野と希望進路の分野が一致しない生徒もいますが、探究学習を通じて身につけた情報の収集・分析力や、問題を自分に引きつけて捉える力、行動力などは、生徒の問題解決力を伸ばし、その結果、入試にもつながると捉えています」（大内先生）

1年次はグループ、2年次は個人で、探究のサイクルを回す

同校にとって探究学習初年度の18年度は、教務課主任や進路課主任、各学年主任が定期的に集まり、探究学習の内容を検討。活動計画ができたから1学年団に渡し、随時実践するといった流れだった。常に慌ただしい状態ではあったが、1年間の議論と実践は、その後の組織的な取り組みの土台となった。19年度は、教務課や進路課、各学年主任、司書教諭、情報科の教師から成る「探究委員会」が授業計画を作成した（図2）。1年次は、地域の課題をテーマに、グルー

図1 「探究の思考」を軸とした「1年次に身につけてほしいこと」

1. 探究のサイクルを回すことで、「探究の思考」を身につける
 - ①情報の収集（現状の把握。今はどうなっているか）
 - ②課題の設定（現状を知った上で、何を問題とするか）
 - ③実験・調査の計画（問題解決に向けて、どんなことを調査するか）
 - ④実験・調査による検証（今までにない研究・活動のはず。実験やアンケートなどを行い、自分の手でデータを集める）
 - ⑤データの分析・解析（データから分らないことをまとめる）
 - ⑥解決策の提案（問題に対しての自分なりの方法を提案）
2. 各教科の力を伸ばし、探究につなげる

※学校資料を基に編集部で作成。

プで探究学習に取り組む。生徒は、自分の興味・関心を基に7分野から1つを選び、その分野で4人1組のグループを作る。そして、グループで探究のサイクルを回した上で、ポスターセッションによる最終発表を行う。指導は、1学年団の教師が中心となり、各分野を2人ずつで担当する。

2年次は、探究のサイクルを個人で回すことを経験させるため、社会問題についての課題を自分で

図2 探究学習の内容

	活動内容	担当教師
1年次	●グループ探究 山形県、または県内市町村の課題を発見し、解決策を提案する。生徒は、自身の興味・関心に基づいて、A～Gの7分野の中から1つを選び、4人1組のグループで探究を行う。A食料・農業、B健康・福祉、C経済、D教育、Eジェンダー、F環境・エネルギー・技術革新、G国際・観光 活動の流れ：①課題の設定、②調査活動、③中間発表、④発表の振り返り、⑤内容のブラッシュアップ、⑥最終発表	・1学年団の教師と、学年づきではない教師 ・A～Gの各分野を教師2人ずつで担当
2年次	●個人探究 地域に限らず、社会問題についての課題を自分で設定し、解決策を提案する。 活動の流れ：1年次と同様	・2学年団の教師と、学年づきではない教師 ・教師1人あたり、生徒約14人を受け持つ
3年次	●個人探究 大学での学びを見据えて課題意識や今後の展望を具体化するために、1・2年次に行った探究学習を踏まえて、大学・学部・学科研究や、小論文作成などを行う。	・3学年団の教師

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

設定し、個人探究に取り組む。そして、3年次は、大学での学びを見据えて、課題意識や今後の展望を具体化するために、大学・学部・学科研究や、小論文作成を中心とした活動を行う。

探究学習の指導に際しては、担当教師の配置を工夫した。質問等を通じて、生徒の興味・関心や疑問を引き出し、思考を深める支援をするファシリテーターに徹するため、探究委員会は、あえて担当教

科とは関連のない分野や課題に取り組む生徒を担当するように、担当教師を割り振った。自分の担当教科だと、つい生徒に答えや研究方法を教えたくなるからだ。

探究のサイクルの中でも、生徒が最も成長するのは「調査」の場面だと、鈴木先生は語る。

「調査では、社会問題の解決に取り組む人に、生徒が自分で連絡して約束を取りつけ、訪問して話を聞きます。課題設定をしたものの、

その課題がいま一つ自分事になっていなかった生徒も、当事者の生の声に接し、現状を知ること、問題意識が急速に深まり、探究学習に取り組む態度が変わります。また、そうした経験をする中で、新たに話を聞きたい人が出てきた時も、臆せず、自分から行動することができるようになります」

「探究の思考」を探究学習の軸に据える

22年度入学生の探究学習は、25年度入試を見据えて、19年度のカリキュラムをベースにしつつ、次のような改善を行った。

●「探究の思考」を生徒・教師間で共有

22年度入試で総合型・学校推薦型選抜の合格者数が増えた要因は、前述の通り、生徒が探究学習を通じて、情報の収集・分析力や、問題を自分に引きつけて捉える力、行動力などを身につけたことにあると考えた。そこで、探究の重要な要素を「探究の思考」(図1)として整理し、探究学習の軸に据えることにしたと、教務課で探究

委員の柴田勝将先生は説明する。

「年度初めに行う探究学習のガイダンスで『探究の思考』を示し、探究学習が目指すところを生徒や教師と共有しました。また、調査や実験には数学や理科の力が必要になるといった、『探究の思考』と教科学習の関係を示すことで、教科の授業への意識も高めました」

●山形県の現状を知る活動を導入

以前はガイダンス後、すぐに課題の設定に取り組ませていたが、県の現状をよく知らない生徒は、課題を見いだすことが難しかった。そこで、図書館がスクラップした新聞記事を活用し、県の課題を一通り俯瞰する場を設け、探究学習の流れを簡易的に経験させた。

●中間発表をスライド形式に変更

11月に行う中間発表は、プレゼンテーションソフトで8枚のスライドを作成し、それを基に発表する形式に変更する。

「以前の発表資料であるA1判のポスターには多くの情報を書き込みましたが、スライドでは要点を簡潔にまとめ、発表時に口頭で補足することになります。表現力

や発表力を育もうと、形式を変えました」(柴田先生)

中間発表では、大学や企業から招いた関係者に寸評してもらう。生徒はそれを受けて再調査・再実験を行い、考察を深め、その内容をまとめて、3学期に行う最終発表に臨む。

「探究学習の評価は、昨年度までは、最終発表時のポスターを生徒が相互評価し、それに教師の評価を加える形で行っていました。今年度は、活動ごとにルーブリックを用いて評価する仕組みを確立しようとしています。また、生徒が毎授業書く振り返りは、生徒の次の学習につなげる形成的評価に活用する予定です」(柴田先生)

各教科・科目の授業にも探究的な学びを組み入れる

同校では、新学習指導要領の理念を踏まえ、各教科・科目の授業でも、生徒が実験や観察を通じて答えを見いだす活動や、生徒同士で議論し、他者の考えも踏まえて自分の意見をまとめる活動など、

生徒が自ら考え、問題解決に取り組む場面を設けている。

「本校の生徒を対象にした授業評価アンケートには、授業で探究的な活動が行われているかを聞く項目があります。学校の実践目標としても掲げられている『探究的な学習の推進』の到達状況を定期的に確認できるようにしています」(鈴木先生)

同校では、各大学による、25年度入試において課す教科・科目等に関する情報の公表を受け、対応を検討中だ。例えば、国語は、22年度入学生の教育課程で、2年次に「文学国語」、3年次に「論理国語」を配置し、3年次に小説を扱わないことになる。そこで、放課後や長期休業時に補習を実施する予定だ。

「25年度入試の動向はもちろん注視していますが、大学入試で求められる力は、今後も根本的には同じはず。入試情報に必要以上に右往左往することなく、社会で求められる資質・能力を生徒に着実に育むために、探究学習や教科学習の改善に取り組んでいきます」(鈴木先生)

大学入試におけるCBTが秘める可能性と今後の課題

入学者選抜にCBT（*1）を活用する大学が増えてきている。アドミッション・ポリシーに掲げる資質・能力を測るために活用されたり、コロナ禍における感染防止策として活用されたりしているが、CBTには、どのようなメリットがあり、その導入には、どういったハードルがあるのか。大学入試センター大学入学共通テスト企画委員会CBT活用検討部会委員を務めた名古屋工業大学の林篤裕教授に聞いた。

CBTの導入で、多様な資質・能力をより評価できるように

大学入試センターでは、高大接続改革や情報教育の推進などの施策への対応の1つとして、大学入学共通テストにおけるCBTの活用について検討してきました。結果的に、それは見送られましたが、個別学力検査では、CBTを活用する大学が増えてきています（P. 25 囲み）。その理由として、コンピュータの活用により、出題形式・解答方法の幅が広がることが挙げられます。CBTでは、音声や動画を活用することができるので、例えば、理科の試験では、実験の動画を視聴させて実験の過程について考えさせる、英語の試験では、ネイティブ・スピーカーからの相

談の音声聞いて、それに英語で応えらるという出題が可能です。

将来的には、受験生の解答に依拠して次の問題を出すなど、受験生が試行錯誤しながら解いていくCBTの試験が行われるかもしれません。情報の試験であれば、受験生がプログラミングをし、それを実行した結果を確認して、修正しながら目標に近づいていけたかを見らるというものが考えられます。「複数の考え方を容認する」という、プログラミングの方法論に沿った出題が可能になるのです。そのように、CBTを上手に活用すれば、社会で求められる資質・能力をより的確に評価することができるようになるでしょう。特に、新学習指導要領では、教科等横断で育成を目指す資質・能力の1つ

として、情報活用能力が挙げられています。文章や図表に加えて、音声や動画など、多様な素材から必要な情報を抽出し、分析する力を測ることもできます。

試験の質を向上させる、
操作ログの活用にも期待

試験での操作ログ（自動的に残る記録）を容易に取得できることも、CBTを導入するメリットの1つです。解答のプロセスを把握する設計の試験にすれば、受験生がどのような思考を働かせたから正解に至ることができたのか、もしくは正解することができなかったのかを可視化できます。

解答に要した時間や、解答の際に見た画面など、受験生が問題に



名古屋工業大学大学院 工学研究科教授、
アドミッションオフィス長
大学入試センター 大学入学共通テスト
企画委員会CBT活用検討部会委員
林 篤裕 はやし・あつひろ

専門は計算機統計学、教育工学、高等教育論。
岡山県立大学、大学入試センター、九州大学
等を経て、2016年9月から現職。

取り組む過程をデータ化することで、問題の質の検証や、大学入学後の教育への活用などが期待できます。例えば、現代文の問題で、ある受験生は、素材文を読み進め

* 1 Computer Based Testing の略称で、コンピューターを使った試験方式のこと。

個別大学の入学者選抜でのCBT活用例

自分の意見や写真の描写などを英語で述べる

東京外国語大学 一般選抜：英語

一般選抜の英語のスピーキング試験を、CBTで実施している。タブレット型のパソコン画面に示される問題は4つのパートから構成され、マイクに向かって音声で解答する。解答の残り時間は、画面にタイマーで表示される。

パート1は、受験生自身に関する質問で、インストラクションを聞き、合図の後、解答する。1つの質問への解答が終わると、自動的に次の質問に進む。パート2は、理由や説明を明確にして自分の意見を述べる問題で、1枚の写真を見て、3つの質問に音声で解答する。パート3は、写真の描写や比較を理由や説明とともに述べる問題で、2枚の写真を見て、3つの質問に音声で解答する。パート4は、抽象的なトピックについて、自身の経験や意見を述べる問題で、3つの質問の解答を1分間で準備した後、2分間でまとめて話す。準備時間が終わると、画面の下に「解答を始めてください」と表示され、音声で解答する。

再チャレンジも可能な基礎学力・学習力テスト

佐賀大学 学校推薦型選抜、総合型選抜

ペーパーテストでは技術的に評価することが難しい能力や領域について評価するため、独自に開発したCBTによる試験を実施している。基礎学力・学習力テストは、数学・物理・化学・生物・英語のうち、2科目程度から出題。問題は教科書レベルで、60分間で10～15問を解答する。

その場でコンピューターが自動採点し、全問正解であれば試験は終了。誤答があった場合は試験は継続となり、画面に不正解だった問題の解説文が表示される。受験生はその解説文を読んで、解答に必要な知識や考え方を学び、不正解だった問題の類題に再度取り組む。基礎・基本の定着度を測ることに加え、学習力を見取するというねらいがある。採点結果は、その後の面接試験の参考資料にもしている。

※独立行政法人大学入試センター「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」（2022年6月）を基に編集部で作成。

る中で、傍線部が出てきたら、それに対応する設問を解き、また素材文に戻るといった解き方をしていた。一方で、別の受験生は、素材文をすべて読んでから設問を解いていたといったプロセスの違いを把握できます。そうすることで、解答が同じでも、どちらの解き方をした受験生に入学してほしいかを、大学が判断することができるとです。ほかにも、素材文を読み終わってから設問を表示するといったこともできるでしょう。つ

試験が効率化されて、複数回の実施も可能に

CBTには、試験を効率的に行えるというメリットもあります。ペーパーテストでは、問題冊子や解答用紙の印刷、輸送、配布、回収などに、労力と費用がかかりま

まり、大学が受験生に求める資質・能力が発揮される認知活動を促すような、精緻な問題設計が可能になるということです。

ですが、CBTでは、それらを大幅に軽減することが出来ます。また、受験者数の増減や、試験直前での問題の修正・差し替えなどにも、容易に対応することが出来ます。ペーパーテストでは難しかった試験の複数回実施のハードルも下がるでしょう。大学入学共通テストは、全国で同時刻に一齐に実施されています。そうした試験では、どうしても一発勝負的になり、病

Tは複数回の実施がしやすいため、再挑戦の機会があることで、不測の事態に対応できるほか、受験生の実力がより発揮された結果に基づく選抜が可能になります。

ただ、複数回実施にする場合は、実施回によって問題が異なっても、受験生同士の能力を適切に比較できるよう、IRT（*2）に基づく統計的に品質管理された問題を作成する必要があります。そうした条件をクリアして、試験を複数回実施することができれば、受験生の資質・能力の経時的な変化を把握することも可能になります。IRTは、ペーパーテストであっても複数回実施の場合には必要ですが、実施や採点を効率的に行うことができるCBTとの親和性が高いのは確かです。

導入時の課題克服に向けて、引き続きの検討が必要

以上のように、CBTには多くのメリットがあります。しかし、大学入学共通テストのような、大規模で、受験生の人生にとって重

* 2 Item Response Theory の略称で、項目反応理論のこと。

要な試験にC B Tを導入するためには、乗り越えなくてはならないいくつかのハードルがあります。

端末やネットワークのトラブルへの対応など、監督者に技術的な専門性が求められるため、ペーパーテストに比べて実施に必要な人員の確保が難しくなります。会場によって、端末の仕様やネットワークの通信速度などの違いによる不公平性が高まるかもしれません。全国的に高い均質の受験環境の確保とトラブルに対応する体制が必要です。テストセンターで実施する場合には、本人確認のための生体認証、不正防止のための監視カメラの設置などは、個人情報やプライバシーの保護の観点から慎重に行わなければなりません。受験生や保護者、さらには社会全体からの理解を得られるような、合理的な説明が求められます。

I R Tを取り入れる場合、従来の素点 (raw score) ではなく、変換点 (scaled score) で得点を算出することになります。素点と同じでも、問題の難易度によって得点が変わる変換点とすることは、日

本ではあまりなじみがないかもしれませんが、それを社会が許容できるかといった問題もあります。

現在の大学入学共通テストは、トラブルが少なく、安定的に実施されています。C B Tを導入するとしても、そのよさを引き継ぐ必要があります。克服すべき課題が多い現状では、大学入学共通テストのような、影響力の大きいテストをC B T化することは、現実的ではありません。C B Tの導入自体を目的化することなく、国内外の最新動向も踏まえながら、受験生や保護者を始めとする社会全体が納得できる形を模索することが重要だと思います。

一方で、個別大学の入学者選抜においては、各大学の判断により、C B Tの導入が進む可能性はあります。受験生に求める資質・能力のうち、ペーパーテストでは評価することが難しい資質・能力でも、C B Tを活用すれば測定できるのであれば、その導入や運営のハードルが高くて、C B Tの活用に踏み切る大学が、今後も出てくると考えられます。

セミナーのご案内

VIEWnext PRESENTS

2022年
11月11日(金)
オンラインで
開催!

今号の特集テーマと連動!

新学習指導要領に対応した大学入試をテーマとするオンラインセミナー

高大接続の視点で見通す2025年度大学入試

VIEW next 編集部・ベネッセ教育情報センター・ベネッセ文教総研による共同企画で、今号の特集テーマと連動したオンラインセミナーを開催します。セミナー開催時点の最新情報を基に、2025年度大学入試の見通しや高校としての課題を整理した上で、25年度大学入試を始めとするこれからの大学入試について、高校と大学が本音で語り合うパネルディスカッションを予定しています。今後の生徒への指導や支援の方向性を考えるヒントを得る場として、ぜひご参加ください。

プログラム (予定)

◎情報提供 高校教育・大学入試・大学教育・社会のトレンドと、2025年度大学入試の見通し

◎パネルディスカッション 高大接続の視点で語り合う、これからの大学入試

登壇予定者：青山学院大学 学長 阪本 浩 / 佐賀大学 副学長 西郡 大 /
山形県立山形北高校 鈴木佳徳 / 京都府・京都市立堀川高校 滝本梨恵子(録画登壇)

開催日時 2022年11月11日(金) 16時00分～17時30分

形式 オンライン ※お申し込みをいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。

参加申し込み方法 右の2次元コード、または、下記URLから登録してください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article12472/>

参加申し込み締め切り 2022年11月7日(月) 参加費 無料



For School Section

学校改革や組織運営に役立つ
事例や情報を、
先生方の思いを乗せてお届けする

P.28

お勧めの分掌 ▶

管理職

教務担当

進路担当

指導変革の軌跡

その時、教師は何を考え、どう動いたか。
学校改革の過程を当事者の言葉で追う

愛媛県立松山南高校

外部人材の活用

教師志望の大学生を支援スタッフに起用。
教師・生徒・大学生がWin-Win-Winになることを目指す

P.32

お勧めの分掌 ▶

学年団

担任



学年団を訪ねて

学年経営に悩む先生方に！
チームづくりの秘訣を掘り下げる

岩手県立^{くずまき}葛巻高校 3学年団

「じりつ」した生徒を育てるため、
「あたり前」を大胆に見直す

P.36

お勧めの分掌 ▶

管理職



いざという時の対応は平時の準備で決まる。学校危機管理の専門家が解説

外部人材の活用における留意点

今号の特集の大阪大学と九州工業大学の記事は、ベネッセハイスクールオンラインでの動画掲載に向けて、ベネッセ教育情報センターが2大学にインタビューした内容を基に作成しました。同記事は当初、ベネッセ教育情報センターの連載コーナーである「新課程レポート」に掲載する予定でしたが、今号の特集とテーマが共通するため、特集にて掲載し、今号の「新課程レポート」は休載しました。

愛媛県立松山南高校

外部人材の活用

教師志望の大学生を支援スタッフに起用。

教師・生徒・大学生がWin-Win-Winになることを目指す



学校概要

- ◎設立 1891（明治24）年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約350人（全日制）
- ◎2022年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、東京大、横浜国立大、名古屋大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、愛媛大、九州大、愛媛県立医療技術大などに276人が合格。私立大は、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ701人が合格。

変革の背景

教師の業務負担軽減を図るため、
県の施策として支援スタッフを配置

県を代表する伝統校である愛媛県立松山南高校は、これまで様々な先進的な取り組みにチャレンジしてきた。SSH（*）は、2002年度の第1期から5期連続で指定を受け、第4期からは、理数科のみだった事業の対象を普通科にも拡大。生徒は、国内外の科学系コンテストで、数々の優秀な成績を収めた。21年度からは、愛媛県の進路指導研究指定校として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を図っている。

生徒の進路実現のため補習なども充実させ、「国公立大学に250人、難関大学に20人が現役合格」という目標を、20年度入試から3年連続で達成した。しかし、それらの様々な取り組みは、教師の熱意に支えられており、多忙化の解消は長年の課題だった。進路指導課長の松田猛先生は、次のように語る。

「愛媛県人は郷土愛が強く、教師の多くは県内出身者です。学校は地域や保護者から大切にされており、教師は仕事にやりがいを感じています。ただ、地域や保護者からの期待に応えようとするあまり、頑張り過ぎてしまう教師は少なくありません」

そうした同県の学校が抱える課題を踏まえ、愛媛県教育委員会は、2つの制度を導入

した（図）。1つは、21年度に導入した「ICT教育支援員（以下、ICT支援員）」で、ICTに詳しい外部人材が、端末の整備や、情報の授業の補助などを担う制度だ。もう1つは、22年度に導入した「大学生スクールサポーター（以下、サポーター）」で、教職に関心のある大学1・2年生が、生徒の学習や教師の業務などを支援する制度だ。生徒の学力向上や教師の業務負担軽減、教師を目指す人材の確保と育成がねらいとなる。ICT支援員は週16時間、サポーターは週14時間の勤務で、地方公務員として給料が支払われる。

22年3月、新年度開始が迫る中、その2つの制度を活用するため、急ぎよ取りまとめ役となった松田先生が思い浮かべたのは、自身

* 文部科学省「スーパー・サイエンス・ハイスクール」の略。

図 ICT教育支援員、 大学生スクールサポーターの概要

ICT教育支援員

目的 1人1台端末の本格運用によるICTの活用や、新学習指導要領の「情報Ⅰ」の実施を踏まえ、ICTにかかわる教師の負担軽減のために配置。

主な業務 ①1人1台端末の活用支援、端末の整備、日常的なトラブルへの対応 ②授業時（主に「情報Ⅰ」）の端末の操作における生徒に対する支援等 ③ICTの活用における教師に対する支援（活用方法の助言等） ④オンライン授業等における機器や接続の準備等

資格 年齢・資格の制限なし。高度な知識・技能を有する必要はないが、パソコンの基本的な操作ができること。

大学生スクールサポーター

目的 教職に関心のある大学生が、生徒の学習支援や教師の事務作業等の補助に従事することにより、教師の業務負担軽減と生徒の学力向上、教師を目指す優秀な人材の確保を図る。

主な業務 ①放課後等の生徒の自主学習の補助 ②授業時の教師の補助 ③進学・就職の面接指導の補助 ④学校行事や模擬試験監督の補助 ⑤教師の事務作業の補助

人員 1校あたり5人（2022年度は6校に計30人）

資格 県内在住で、教員免許状の取得可能な愛媛大学、松山大学に在籍し、教師を志望する1・2年生。

注）松山南高校では、大学1年生は大学生活に慣れていないことを考慮し、2年生のみに依頼した。

※学校資料を基に編集部で作成。

が3年間受け持った2年前の卒業生だった。「卒業生であれば、本校のことをよく知っていますし、私たちは卒業生の人柄を知り尽くしているので、安心して仕事を任せられます。教師の業務負担軽減に加えて、教師を目指す卒業生は学校の仕事を経験でき、そして、自分の目標に向けて励む卒業生の姿は生徒のロールモデルとなり、生徒が進路について深く考えることにつながると考えました。教師・大学生・生徒がWin-Win-Winの制度にしたいと思いました」

変革の一手

支援スタッフが授業のサポートに入り、 教師の授業改善も支援

同校では、22年度、ICT支援員として、ICTに詳しい愛媛大学工学部2年生1人を、サポーターとして、愛媛大学教育学部2年生の4人と同大学法文学部2年生の1人を採用した。

ICT支援員の仕事は、ICTの活用に関

する教師への支援や、教科・情報の授業における生徒への支援などだ。ICT支援員は、授業への助言をしてくれる心強い存在だと、家庭科・情報科担当の徳本みはる先生は語る。

『「情報Ⅰ」の授業では、ICT支援員は、私とのチーム・ティーチングで課題に行き詰まった生徒を支援してくれています。そして、生徒の理解が不十分だった点や、私が気づけていなかった生徒の様子などを、授業後に報告してくれます。それは私にとって、生徒への説明の仕方を変えた方がよいか、別の教材を使うべきかなどと考えるきっかけになり、授業改善につながっています」

ICT支援員の東野亨省（こうせい）さんは、自身の役割を次のように話す。

「教壇に立つ先生からは見えないパソコンの画面が、教室の後ろに立つ私は見ることができするため、画面の状況から、生徒が何に戸惑っているのがよく分かります。そこで、先生が見えていない生徒の様子をつかみ、それを先生に伝えれば、先生の授業改善に役に立つのではないかと思い、生徒の状況をノートに書き留め、具体的な改善策も考えて、先生に報告することにしました（P.30写真）」

サポーターの仕事は、生徒の学習支援や、課題プリント・小テスト等の教材作成の補助、授業・学校行事等における教師の補助、休日

の模擬試験監督など、多岐にわたる。サポーターの里見綾華さんの初仕事は、伝統行事のリレー・綱引き大会の補助だった。

「初めて教師側の立場で学校行事に参加し、幾つもの種目が時間通りに進められていたのは、先生方や生徒会役員が入念に準備していたからだっただのと気づきました」（里見さん）

また、家庭科の教師を目指す里見さんは、徳本先生が家庭科の授業で行う課題研究を補助している。SDGsについて学んだことを絵本にする課題では、生徒に提示する見本の絵本を里見さんが作成した。

学校家庭クラブ（家庭科で学んだ知識・技能を実践する課外活動）では、クラブ顧問の



写真 「情報Ⅰ」の授業で、生徒の質問に答える東野さん。授業改善の役に立つのではないかと考え、生徒からの質問や、生徒の理解が不十分だと感じた箇所などを書き留めたノートを、授業者に渡している。

徳本先生に代わり、同クラブのOGである里見さんが、生徒が金曜日の放課後に行う活動の準備を支援している。活動の内容をよく知る里見さんからのアドバイスによって作業が効率化し、その結果、以前よりも短い時間で準備することができるようになった。

研修用動画の作成や新機器の活用など、支援スタッフの挑戦が教師の刺激に

校内で共有する資料作りには、ICT支援員の東野さんのICTスキルが大いに役立っている。例えば、校内研修は、他の業務の関係で参加できない教師が少なくない。そこで、プログラミング教材の使用方法を説明する校内研修を行った際、東野さんにその様子を撮影して10分程度の動画に編集してもらい、プログラミング教材の使用マニュアル動画として、研修に参加できなかった教師が好きな時間に見られるようにした。視聴した教師からは、「分かりやすい」「業務の効率化につながった」などと好評だった。

「ICT支援員だからこそ、新しいことに挑戦するようにしています。例えば、今年度、3Dプリンターが配備されましたが、先生方は忙しくて、使う時間を取れずいました。そこで、私が使用マニュアルを作ったところ、『生徒が3Dプリンターで制作したものを文

進路指導課長

松田 猛 まつた たけし

教職歴26年。同校に赴任して5年目。進路指導研究指定推進委員。数学科。

SSH推進課長

若山 勇太 わかやま ゆうた

教職歴19年。同校に赴任して5年目。STEAM教育推進委員。理科。

SSH推進課

徳本 みはる とくもと みはる

教職歴26年。同校に赴任して9年目。授業改善推進委員。家庭科、情報科。

図書・情報課

須之内 智彦 すのうち ともひこ

教職歴12年。同校に赴任して3年目。ICT活用推進委員。地理歴史・公民科。

ICT教育支援員

東野 亨省 ひがしの こうせい

愛媛大学工学部2年。

大学生スクールサポーター

里見 綾華 さとみ あやか

愛媛大学教育学部2年。

化祭に展示してはどうか」といったアイデアが先生方から出てきました。私が思い切って行ったことから、新しい取り組みが生まれ、広がっていくところにも、ICT支援員の仕事にやりがいを感じています」（東野さん）

大学生の頑張る姿が教師にとって大きな刺激になっていると、SSH推進課長の若山勇太先生は語る。

「私たちは、大学生の活躍に、未来の教師の姿を見ているような気がしています。例えば、授業で使うプリントの印刷を頼むと、複数枚ある場合には、教師の配る手間を省き、手に取った生徒が整理しやすいよう、1人分ずつまとめて折って折ってくれています。よりよい方法を考えてチャレンジする姿に、未来の教師への期待が膨らむ一方で、有望な教師の卵が私たちの背中を見ていることに、よい意味でのプレッシャーも感じ、背筋が伸びる思いです」

生徒が、大学生から受ける刺激も大きい。学校行事や部活動などで時間をともにする中で、大学生は、生徒に学生生活について話したり、生徒からの学習の質問に答えたりしている。時には、1時間以上話し込むことがあると言う。図書・情報課の須之内智彦先生は次のように述べる。

「生徒が大学生と日常的に話すことは、学習意欲や進路意識の向上の面でもメリットが大きいと思っています。また、大学生は、私たち教師の姿を見て、仕事を一生懸命覚えようとしています。生徒はそうした大学生を頼もしく思っているようで、よく相談をしたり、勉強を教わったりしています」

変革の成果・展望

業務の負担軽減を実感する教師 進路指導等での支援スタッフの活用を検討

ICT支援員やサポーターが配置されてから半年が経ち、教師は業務の負担軽減を徐々に実感している。SSHの課題研究・教科横断型授業、ICTを活用した授業の準備や改善に、教師が取り組みやすくなった一方、大学生にとっては、母校での経験が自身の成長のステップになっている。

「先生方の授業の進め方を間近で見ることができると、普通のアルバイトではできない経験を積んでいます。様々な業務がありながら、生徒の相談に乗ったり、部活動の指導をしたりと、教師の大変さを実感しています。これからも、先生方のどんな負担をどうすれば減らすことができるかを考え、私自身も成長していきたいと思っています」(東野さん)

「生徒から『ありがとうございます』と言われることが、何よりもうれしいです。私がかかわることで、生徒が新しいことができるようになっていく姿を見るのも楽しみです。教師になりたいという思いがさらに強くなりました」(里見さん)

今後の課題は、大学生の力を、教師の業務

補助だけでなく、進路指導などにもいかに活用していくかと、須之内先生は語る。

「業務補助の仕事には限りがありますが、大学生の力による教育活動の活性化には、無限の可能性があると思っています。3Dプリンターについても、東野さんが率先して使い方を示してくれたおかげで、文化祭での活用のアイデアが浮かび、実現しました。教師と大学生の力がともに発揮され、それが相乗効果を生むことで、生徒の可能性がさらに広がっていくと期待しています」

ICT支援員やサポーターが配置された効果を可視化することも、制度の継続・拡大のためには必要だ。制度導入後、教師の負担がどの程度軽減されたのか、生徒にどんな影響をもたらしたのか、大学生はどのように成長したのかといった効果検証を、アンケートを実施するなどして行う予定だ。

「大学生の活用は始まったばかりで、暗中模索のさなかですが、今後、大学入試に向けた模擬面接や、グループディスカッションの練習、志望理由書作成の指導などへの活用を考えています。このありがたい制度が次年度以降も続くよう、私たちがモデルケースをつくって紹介することで、制度が広く知れ渡り、多くの学校に浸透していくことを期待しています」(松田先生)



学年団を訪ねて

「じりつ」した生徒を育てるため、 「あたり前」を大胆に見直す

岩手県立^{くずまき}葛巻高校 3 学年団



学年団が直面した課題

- ◎与えられたことをきちんとこなす生徒は多かったが、主体的に学習に取り組む生徒を十分に育てることができていなかった。
- ◎それまであたり前だと思っていた指導を見直し、生徒へのかかわり方を変えていく必要があった。

学校概要

地域連携型中高一貫校として、町内3中学校との数学及び英語の授業交流を推進。毎週、同校の数学科と英語科の教師が町内3中学校の3年生に、中学校の教師が同校の1年生に、それぞれ数学と英語の授業を行い、中学校から高校まで切れ目のない学習指導を実践している。2017年度には同校生徒を対象とした無料の町営学習塾が開校。多くの生徒が入塾しており、同校への入学を希望する理由の1つになっている。また、「くずまき山村留学生」として、全国から生徒を募集。22年度は12人の山村留學生が入学した。



設立 1948(昭和23)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約50人

2021年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、室蘭工業大、岩手大、秋田大、茨城大、長岡技術科学大などに10人が合格。私立大は、八戸工業大、東京理科大などに延べ9人が合格。短大・専門学校進学18人。就職4人。

最初の学年会議で示した

「適度に手をかけない指導」への挑戦

2021年度、岩手県立葛巻高校の2学年

主任と進学クラスの担任を務めることになった抱石鉄也先生は、最初の学年会議で、「じりつ（自立・自律）」への壮大なる挑戦」と題した学年の基本方針を示した（P.34図）。

「与えられたことをきちんとこなす生徒は多いけれども、主体的に学習に取り組める生徒は少ない。そうした状況は、これまでと同じ指導を続けていたのでは変わらないと考え、最初の学年会議で、『適度に手をかけない・世話しない・寄り添わない』という指導のスタンスを先生方に提示し、理解を求めました。今まであたり前だと思っていた指導を見直したかったのです」

週末課題を減らし、大型連休ではあえて課題を出さないことで、生徒に自分がやるべきことを考えさせたいという抱石先生の提案に、当時2学年に所属した清川頼宣先生は、身の引き締まる思いがしたという。

「極端な言い方をすれば、本校の指導は、生徒が受け身であることを前提に、教師が一生懸命手をかけるといったものでした。これまでの与える指導は、短期的には効果があるけれども、変化の激しい時代を生きる生徒のためにはならないのではないか。抱石先生の提案を聞きながら、自分自身の生徒へのかかわり方を改めて考え、変えていく大きなチャンスになりそうだと思います」

「じりつ」というキーワードは、「じりつした学び」「じりつした学校行事」などと、各時期の生徒の状況に合わせる形で、学年集会などで発信されるようになった。また、毎月発行される学年通信でも、「じりつ」というメッセージが繰り返し発信された。その際、指導スタイルの大胆な変化を、生徒が確実に理解するように配慮したと、学年通信の製作責任者である島田政美先生は振り返る。

「抱石先生は、学年集会などの生徒と向き合う場で、『じりつ』というメッセージを、パワフルな言葉とともに情熱的に発信していました。そこで、学年通信では、抱石先生が使った言葉とは違う表現で同じメッセージを伝えることを通じて、学年主任の思いは学年団全体の思いでもあることを生徒に伝えたいと考えました」

島田先生は、それまでの学年通信であたり前のように掲載されていた定期考査の教科別の平均点などに代えて、学年団の教師によるエッセーを月替わりで掲載。紙面の大半を、「じりつ」を願う教師の思いや、「じりつ」に向けて生徒と同じようにもがいた教師の思い



リーダーに聞く！

5つのQ&A

Q

どのようなチームを目指しましたか？

A

改まった会議ではなく、日々の雑談で物事が決まるチームです。様々な企画が、職員室での雑談の中で生まれています。

Q

リーダーとして心がけていることは？

A

何かに取り組む時に、最良と最悪を想定して準備・計画することです。生徒、そして学年の先生方には、最良の状態に至った時のワクワク感を伝えて、アクティブになつてもらい、一方で私は、「もしも」の時に備えるようにしています。

Q

学年団としての「成功」は？

A

生徒が自立・自律することです。今まさに、それが実現していると感じています。

Q

リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A

学校によくある暗黙のルール、慣習を変える力です。あくまでも、生徒にとって価値があるかどうかで物事を判断しています。

Q

リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A

改革を進める際、校内でのビジョンの共有が不十分な時があると自覚しています。同じ思いを持つ先生方が、私とは違うアプローチで周りに説明するなど、サポートをしてくださるので、とても感謝しています。

R3 年度葛巻高校 2 学年 学年長基本方針（たたき台）

文責：抱石鉄也

【個人の 5 カ年計画】 葛巻高校を SGLH に

（Super GLocal Highschool スーパーグローバルハイスクール）

【R2 年度入学生 R3 年度テーマ】

～「じりつ（自立・自律）」への壮大なる挑戦～

【生活・学習について】 適度に手をかけない・世話しない・寄り添わない

・服装、あいさつについてのコンセンサス

・朝学習について 抱石案：監督つけない（自立・自律への挑戦 時々ゲリラ監督）

・週末課題について 適量（＝これだけ？と生徒が思う量）を月曜日 朝厳守

・GW 課題について 提出を義務づける課題は全教科出さない。

*スタディーサポート活用 book（4/22 配布）も提出を義務づけない

*ただし、休み明けのスタディーサポートの「結果」で評価・指導・面談する。

それまでの同校の指導の軸とも言えた「生徒に一生懸命手をかける指導」から、「適度に手をかけない指導」へと明確な転換を求めた。そして、生徒が自ら勉強したくなるような新たな指導が、その後次々と仕かけられた。

※学校資料をそのまま掲載。

出で埋めるようにした。そのようにして、学年団として一番大切にしたいメッセージを、学年団の教師全員の言葉で生徒に伝えた。

自ら学ぼうとする意志を育むため、ユニークな新企画を次々に実現

与える指導を減らす一方で、抱石先生は、「ジュエリープロジェクト」を企画した。それは、進学クラスの上位者を選抜し、週 1 回、放課後の 30 分間を使って、国公立大学の個別

学力検査の問題のような、高度な思考力を問う国語・数学・英語の問題に生徒が協働して取り組む企画で、学びの楽しさを味わわせながら生徒の力を磨き、光らせたいという思いをプロジェクト名に込めた。

21 年度のジュエリープロジェクトで、数学の作問を担当した鳥海貴広先生は、毎週 1 回、チームになって難問に向き合うことで、生徒は学びに対する自信を深めていったと語る。

「学力は高いのに、自分の考えを表現することに自信を持っていない者もいます。そうした生徒が、仲間と一緒に問題に取り組むことを繰り返す中で、主体的に考え、自分の意見を表現する力を身につけていきました」

同プロジェクトの翌日に、生徒たちが問題について引き続き議論する姿も見られるようになるなど、生徒の変化を感じた鳥海先生だが、「深い思考を求める問題を作ることを通じて、生徒だけでなく教師の私の力も磨かれた」と、率直に語る。

同プロジェクトは、就職クラスにも影響を与えた。2 年生の就職クラスの副担任を務めた梶沢和歌先生は、「職員室での雑談から、新たなプロジェクトが始まった」と話す。

「ジュエリープロジェクトでの生徒の輝きを見て、学年団の先生たちと、『就職クラスでも何かしたいね』といった話をする中で、資格取得を通して生徒がそれぞれの花を咲か

せる、『フラワープロジェクト』の企画が生まれました。6 人の生徒を選抜し、1 月の全商簿記検定 3 級、翌年 6 月の同 2 級の取得に向けて切磋琢磨させたところ、3 級全員合格、2 級 1 人合格という成果を上げました」

就職クラスの生徒の活躍が進学クラスの生徒の刺激になると考えた学年団は、就職クラスが生徒が講師になって進学クラスの生徒に簿記を教える授業を開催した。

「進学クラスの生徒の中には、起業を志す者もいますから、簿記や会計を学ぶことは、進路を考える上でも意味があります。普段おとなしい生徒が生き生きと簿記を教える姿は印象的で、進学クラスの生徒だけではなく、普通教科の先生にとっても、簿記という分野に出合えたことは、実社会について考える機会となりました」（梶沢先生）

進路を主体的に考えるために社会に対する視野を広げる試みとして、新聞記事を活用した「朝学習 Sophia」も始めた。週 3 回、学年団の教師が分担して新聞記事を選び、内容理解・要約・意見論述を求めるプリントを作成して、生徒に取り組ませている。国語科の三船秀樹先生は、取り組みのねらいを、「小論文対策でもあり、生徒と教師がともに学ぶ雰囲気づくりでもある」と説明する。

「抱石先生は、内容理解・要約・意見論述を求めるだけでなく、『私は今、こう考える



学年団を訪ねて



教務主任 (21年度2学年所属)
清川頼宣 きよかわ・よしのぶ
教職歴9年。同校に赴任して6年目。
地理歴史・公民科。



1学年主任 (21年度2学年副担任)
梶沢和歌 かばさわ・わか
教職歴26年。同校に赴任して2年目。
商業科。



3学年副担任・総務部副部長
島田政美 しまだ・まさみ
教職歴20年。同校に赴任して3年目。
家庭科。



3学年副担任・保健厚生主任
三船秀樹 みふね・ひでき
教職歴24年。同校に赴任して2年目。
国語科。



3学年副担任・担任・生徒指導部
島海貴広 ちようかい・たかひろ
教職歴11年。同校に赴任して6年目。
数学科。



3学年主任・担任・進路指導部
抱石鉄也 だきいし・てつや
教職歴26年。同校に赴任して2年目。
英語科。

けど、高校生の頃は、こんな考えだった』などという教師の自己開示や、記事の内容からもう一步踏み込んだ問いかけをプリントに加えて、生徒に熟考を促していました。ほかの先生方も、抱石先生の工夫に倣うようになり、皆が楽しみながらプリントを作成しています。生徒の朝学習後、職員室で学年団の先生方が、プリントで取り上げた新聞記事について自分の考えを語り合うこともよくあります」

生徒の「じりつ」を促す過程で、 教師も「じりつ」を果たす

3年生に進級した生徒たちには、少しずつ変化が見られている。

「2年次の12月から、生徒には、その時点での志望校に対する志望理由書を書かせるとともに、受験勉強における『じりつ』として、その大学に合格するための具体的な学習計画を作成し、それを担任にプレゼンすることを課しています。そのプレゼンに合格すると、受験勉強をサポートする担当教師が決まり、本格的な対策が始まります。今年度の3年生は1学期のうちに学習計画を立案し、主体的に学習に取り組んでいます」(抱石先生)

前例をただ踏襲するのではなく、生徒に合った企画も次々と打ち出す学年主任と、そ

れを生徒とともに楽しむ学年団の教師たち。島田先生は、『何でもやってみよう』という雰囲気は学年団の中に満ちている」と語る。

「生徒のために何ができるのか、自分の考えを遠慮なく言える学年団です。教師同士が本音で話し合ってから生徒に向き合うので、生徒も、教師を選んで態度を変えることはなく、どの教師の言葉にも耳を傾けています」
「生徒には学校生活を楽しんでほしいです。私たちも楽しみ、学ばないと」と、抱石先生。「じりつ」を目指した生徒と教師の学校生活はまだまだ続いていく。

* 学年団 輝きのポイント *

- * 学年団として一番大切にしたいメッセージを、学年団の教師全員の言葉で生徒に伝えた。
- * 教師間の対話・雑談を大切にしてきたことで、互いの取り組みや考えから刺激を受け、新たな挑戦を楽しむ雰囲気が醸成された。

外部人材の活用における留意点

解説者



日本女子大学
教職教育開発センター
教授 坂田 仰

大阪府の公立高校に勤務後、東
京大学大学院法学政治学研究所
公法専攻博士課程単位取得退
学。1996年、日本女子大学に
赴任。専門は、憲法学、公教育
制度論。2021年9月に『新訂
第4版 図解・表解教育法規』（共
著、教育開発研究所）を出版。

学校で起こり得る危機に対し、どのような備えをしておくべきか。事故や災害などが発生したら、被害を最小限にとどめるためにどう対応すればよいのか。学校の危機管理について研究する坂田仰教授が解説する本コーナー。第10回は、外部人材の活用における留意点について解説する。

急速に進んだ外部人材の活用 法制度は整備中

かつては、学校教育にかかわる人は、教師や事務職員、用務員などに限られていましたが、2000年代頃から、ALTや外部指導員、スクールカウンセラー、地域ボランティアなど、様々な人たちが生徒の学びを支えるようになりました。専門的な知識・技能を持つスタッフや、教師の業務を支援するスタッフは、学校や教師にとって心強い存在です。

今では、チーム学校として、また、働き方改革の一環として、外部人材との連携・協働による教育活動が求められ、毎日のように学校では、外部からの人の出入りがあると思います。しかし、外部人材の活用は急速に進んだた

め、法制度は整備中の段階です。部活動指導員や教員業務支援員（スクール・サポート・スタッフ）、情報通信技術支援員（ICT支援員）などは、学校教育法施行規則の一部改正（*1）により、名称や職務内容が規定されましたが、問題が起きたら、その都度対処しているというのが実情かと思っています。

外部人材の雇用形態を確認し、 指揮命令権の有無を把握

そうした状況下で、まず理解しておきたいのが、外部人材の雇用形態です。雇用形態によつては、学校に外部人材への指揮命令権（*2）がないからです（図）。

外部人材の雇用形態には、①学校設置者

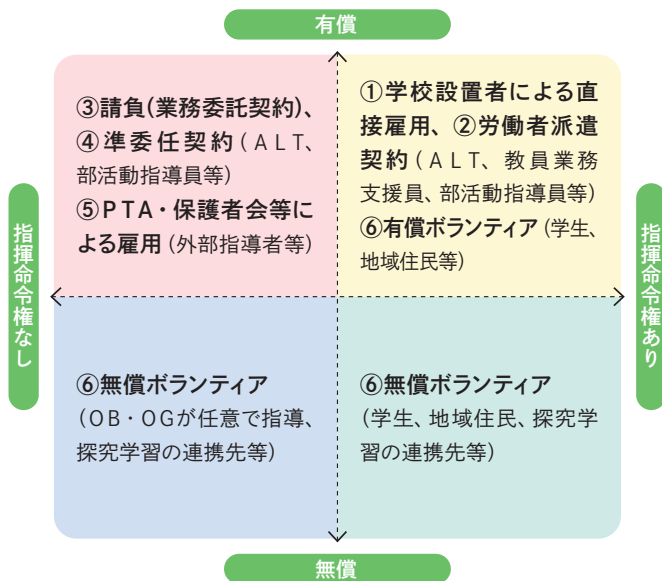
外部人材との無用なトラブルを防ぐ

- ✓ 外部人材の雇用形態を確認し、指揮命令権の有無を把握する。
- ✓ 特に、指揮命令権のない請負や準委任契約では、契約事項に注意を。
- ✓ ボランティアにも順守事項を説明。また、公的書類で身元を確認しておくことも大切。
- ✓ 外部人材の人物像の把握は、透明性の確保や、生徒・保護者への説明責任のためにも必要。

*1 部活動指導員は2017年3月、教員業務支援員と情報通信技術支援員は21年8月の改正による。

*2 労働者に対して業務上の指示を行う権限。

図 外部人材の分類



※坂田教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

(自治体や学校法人)による直接雇用、②労働者派遣契約(*3)、③請負(業務委託契約)、④準委任契約、⑤PTA・保護者会等による雇用、⑥ボランティア(有償・無償)があります。そのうち、学校に指揮命令権があるのは、①学校設置者による直接雇用、②労働者派遣契約で、業務の進め方の指示や、業務遂行に関する改善の要求を、外部人材に直接行うことができます。また、体罰やわいせつ行為、情報漏洩などを起こしそうな場合、学校が直接指導できます。⑥ボランティアも、基本的に

は指揮命令権がありますが、依頼の仕方によっては、指示や要求が難しい場合があります。

一方、③請負(*4)、④準委任契約(*5)は、原則として学校に指揮命令権がありません。学校設置者は、派遣業者と契約を結び、派遣される外部人材との間には労使関係がありません。学校は、外部人材に直接指示ができず、要望等は派遣業者に伝え、派遣業者が外部人材に指示を出すという手順になります。ALTに多い雇用形態ですが、学校に指揮命令権がないため、教師は、ALTに対し、直接指示をしたり指導の改善要求をしたりすることができません。故意ではないとしても、契約違反とならないよう注意しましょう。

順守してほしい事項が 契約内容にあるかの確認を

外部人材が問題を起こした際には、直接雇用関係になくても、学校設置者や学校が、責任を持つて対応することが原則です。そこで重要なのが、契約内容です。体罰やわいせつ行為、宗教や政治における中立性、守秘義務などに関する内容が、派遣業者との契約の条項にあるかを確認しましょう。特に、指揮命令権のない雇用形態では、派遣業者に、外部人材への契約内容の順守の徹底を促します。

ボランティアにも、有償・無償にかかわらず、順守してほしい事項を書面で伝え、理解してもらいましょう。探究学習や就労体験などで一時的に協力を依頼する場合も、無用なトラブルを避けるために、覚え書きを結ぶとよいかもしれません。また、所属先のボランティア団体や、個人の身元を確認することも大切です。残念ながら、偽の情報を伝えられ、問題発生時に連絡がつかないといったことが起きています。公的書類で身元を確認しておく、そうした事態を避けられます。

損害賠償が発生したら、まずは学校設置者が賠償金を支払うことになりますが、問題を起こした外部人材や派遣業者に、契約違反として損害賠償を請求できます。できるだけ、契約書等に、損害賠償請求に関する条項を入れておくようにしましょう。

生徒や保護者から見れば、学校で働く人は皆、「学校の人たち」です。学校が契約に直接かわかっていなくても、外部人材の派遣の経緯や雇用形態、人物像を把握することは、透明性の確保や、生徒・保護者への説明責任の観点からも重要です。実際、外部人材による体罰や、中立性を損なう勧誘などの問題が起きています。私立学校を中心に、教師の派遣も進んでいますから、重大事案が起こる前に注意を向けていテーマの1つだと思います。

*3 派遣業者が雇用する労働者を、他者の指揮命令下で労働させる契約のこと。
*5 特定の業務を遂行する契約。

*4 成果物を完成・納品させるが、その過程は問われない契約。

生徒の学びや進路選択、その後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として解説します。

水ストレス

日本は、世界の水問題の重要な当事国

日本のように、水道の水をそのまま飲むことができる国は、世界にはわずかしかなりなく（図）、水道水を飲むどころか、水不足に苦しむ国が多くあります。特に、安全に利用できる水が十分に得られない、中東や北アフリカなどでは、不衛生な水の利用による感染症のまん延などの問題が深刻化しています。

水不足により日常生活に不便を強いられている状態を、「水ストレス」と言います。その指標として、人口1人あたりの年間使用可能水量が用いられ、1,700 トンを下回る状態になると、水ストレスが高いとされます。

今後、世界の広範囲で、水ストレスは高まると予測されています。その大きな原因の1つが、人口の爆発的な増加です。人口が増えると、生活用水のみならず、農業や工業に必要な水も増加するからです。

さらにその状況に追い打ちをかけているのが、気候変動です。干ばつや洪水、熱波といった異常気象が、世界各地で頻発し、水資源の不安定化をもたらしています。日本も例外ではありません。例えば、豪雪地帯では、春先から徐々に雪解け水が流れ出し、安定的に水が供給されますが、温暖化により降雪量が減ると、そうした機能が失われかねません。

世界的な水不足は、飢餓の広がりや、水を巡る紛争の多発

といった事態にもつながります。さらに、日本人の生活にも直結する水不足による問題として、食料価格の高騰が挙げられます。生産に大量の水が必要とされる穀物は、人間が食べるだけではなく、家畜の飼料にも使われます。水不足によって穀物の生産量が落ち込むと、食肉の生産量にも影響を及ぼし、食料価格が跳ね上がる恐れがあります。

日本は水資源が比較的豊富な国ですが、一方で、穀物などを輸入に頼っています。輸入した穀物などを自国で生産したと仮定した場合に推定される必要な水の量を表す「バーチャルウォーター（仮想水）」の考え方を踏まえると、実は日本は、世界有数の水の輸入国と言えます。つまり日本は、世界の水問題とは無関係どころか、重要な当事国なのです。

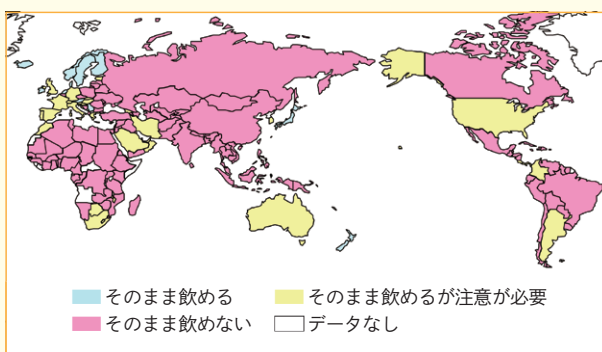
各分野の技術を結集し、水問題にアプローチ

そうした中、科学技術の力で、水問題の解決を図る動きが活発化しています。海水の淡水化や、下水の再生利用といった技術がその代表例で、既に実用化されているものもあります。私の研究室でも、LEDが発する紫外線で水を消毒処理し、水道インフラが未整備の途上国や山間地域などで給水システムを確保する技術を開発しています。

そうした水処理技術を普及させる上で大きな壁となっているのが、コストの問題です。多額の資金を投じなければ安全な水を手に入れられないという状況下では、貧しい国や地域が置き去りにされ、水不足による問題がますます深刻化しかねません。そのため、企業による「水ビジネス」を活性化する制度や仕組みづくりを進め、コストや地域格差といった問題をクリアすることで、水処理技術が世界中に広がっていくことが期待されます。

持続可能な社会を実現する上で、水問題の解決は不可欠です。水処理技術を開発する工学を始め、気象学や環境学、衛生学、処理された水を飲むことに対する人々の心理や行動を研究する心理学など、文理を問わず、様々な学問分野の研究成果を結集させたアプローチが、強く求められています。

図 世界の水道水の現状



* 国土交通省水資源部作成資料（2021年6月時点）を一部改変して掲載。

解説者



東京大学大学院 工学系研究科 准教授

小熊久美子 おぐま・くみこ

専門は環境工学。安全な水を安定的かつ持続的に提供するための浄水技術や水供給システムを研究。国内外の遠隔地や離島など、水道未普及地区において実証研究に取り組む。

VIEWnext ONLINEでは、トレンド・ワードについて、誌面でお伝えし切れなかった内容を「学ぶ・働く・暮らす」の切り口で解説しています。右記の2次元コードからアクセスし、ご覧ください。



For Teacher Section

教師個々の教科指導・進路指導に
役立つ事例や情報を、
先生方の思いを乗せてお届けする

P.40

お勤めの分掌▶

教務担当

担任

発問・課題設定をキーに見る

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

教科の見方・考え方を働かせる
問いや課題を通じて学びが深まる授業に迫る

情報 東京都立神代高校 稲垣俊介

P.40

「なぜ、これを学ぶのか」を自問させることで、
学びへの目的意識を持たせ、主体性を育む

国語 大阪府立泉大津高校 片畑友亮

P.44

日々の授業に主体的に取り組めるよう、
身につけた力を発揮する「学びの舞台」を設定

P.48

お勤めの分掌▶

進路担当

学年団

担任

マイ・ストーリーを語る
生徒を育む進路指導

これまでの自分と将来の自分を、
大学での学びと結びつけて語る生徒を育む

1・2年次 ポートフォリオ活用
和歌山県立田辺高校

学びや活動の「記録」を基に、
展望につながる「気づき」を促す

P.50

お勤めの分掌▶

進路担当

学年団

担任

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走
クローズアップ! 就職指導

社会や企業が変化する中、
就職活動を頑張る生徒をどう支援するか

低学年次からの就職観の育成
1年次・2年次

週1回の「出勤」で、働くための力を育む
大阪府立布施北高校

P.52

お勤めの分掌▶

学年団



チーム
新課程
学年主任

Supported by
ベネッセ文教総研

新課程初年度でも迷わない! 各月の指導のポイントをリストアップ

11月12月のポイント

キャリア意識を高め、
読解力・思考力の育成へ

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

情報

「なぜ、これを学ぶのか」を自問させることで、

学びへの目的意識を持たせ、主体性を育む

東京都立神代高校 稲垣俊介

12:40 本単元の説明



稲垣先生は、本時がこれから11時間かけて行うプログラミング学習の最初の授業であり、本時の実習に前向きに取り組めば、プログラミングに親しみを持てるようになる、と伝えた。「SCRATCH」(*1)以外のプログラミングの経験の有無を聞くと、約7割の生徒がないと回答。

13:02 グループ内で自分のアイデアを発表



4～5人でグループを組み、1人2分間で自分が考えたアプリについて発表。稲垣先生は、発想を広げられるよう、「持ち時間が余ったら、聞き手が質問して」と、生徒同士の対話を促した。また、「笑顔でうなずいたり、拍手をしたりすることで、発表をしやすいしましょう」と声をかけた。

本時の概要

【対象／教科／科目】1年生／情報／情報Ⅰ 【分野／単元】コンピュータとプログラミング（本時は、全11時間のうちの1時間目。P.43に本時の指導計画を掲載）
【育成を目指す資質・能力】思考力、表現力、主体性
【学習内容】実現可能性のある理想のスマートフォンのアプリケーション（以下、アプリ）を、個人で考えてワークシートにまとめ、グループ内で発表した。プログラミング学習の導入として、「なぜ、プログラミングを学ぶのか」を考えるとともに、プログラミングで実現できることに発想を広げさせた。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

いながき・しゅんすけ 教職歴18年。同校に赴任して3年目。情報科主任教諭。博士（情報科学）。東京都高等学校情報教育研究会・情報Ⅰ大学入試検討委員会委員長。筑波大学や國學院大学でも、情報教育の講座の講師を務めている。

学校概要

◎東京府立第15高等女学校として設立。教育目標に「学び、鍛え、輝け」を掲げ、「責任を伴う自由」を重視する伝統的な指導を通じて、自立した社会人の育成を目指す。主体的な学びの実現に向けて、オンライン個別学習の活用や、補習・講習の充実、自習室の開放など、学習環境の整備に力を入れている。

◎設立 1940（昭和15）年

◎形態 全日制・定時制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約280人（全日制）

◎2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、茨城大、東京農工大、長岡造形大、東京都立大に5人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、國學院大、上智大、成蹊大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ702人が合格。



*1 マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボが開発したプログラミング言語学習環境。用途を問わず、無料で利用でき、世界150か国以上で使用されている。

12:50 個人で「理想のアプリ」を考案

主
対

生徒は、10 分間で、自分が理想とするアプリを周囲と相談しながら考案。アプリのメイン画面のデザインや機能の紹介、そのアプリがほしい理由などをワークシートに記入した。稲垣先生は、「新しいアプリではなく、既存のアプリにほしい機能を考えてみても OK です」などと声をかけた。

12:45 本時の目標を提示



主

稲垣先生は、プログラミング学習を始めるにあたって、なぜ、プログラミングを学ぶのかを、自分事として理解することが大切であり、それが本時の目標であることを伝えた。そして、その目標の達成に向けて、本時は、個人で理想のアプリを考え、発表し合う活動を行うと伝え、具体的な手順を説明。

本時のキー課題

13:18 本時の振り返り、次時の内容の提示



主

授業時間内にワークシートを完成できなかった場合は、自宅で仕上げて提出するよう指示。次時は、1 人 45 秒間で自分の「理想のアプリ」について全体発表をし、アイデアを高め合うことを伝えた。最後に、生徒はアンケートフォームにアクセスして、授業の振り返りを入力した。

13:13 プログラミング学習の目的を説明

主
深

発表後、稲垣先生が、すべてのアプリはプログラミングで作られていると説明。「授業で基本を学べば、プログラミングの専門書を理解できるレベルになり、そうなれば、自分で専門書を読み、自分にぴったりのアプリを作ることができます」と、プログラミング学習の目的と、その先にあることを伝えた。

●私が目指す授業

学習内容が「自分事」となる
よう、課題や進め方を工夫

情報は、生徒によって関心や熱意の度合いが大きく異なる教科です。プログラミングなど、学習内容に体系的な要素が含まれていることに加え、大学入試で課せられない教科だったことも、その一因と考えられます。

しかし、情報は、どのような職業に就く上でも必須となる、ICTの知識・技能を養う教科です。以前は授業に関心を持てるよう、高度なプログラミングの事例を見せるなど、生徒にとって目新しさと驚きのある授業をしていました。ただ、それでは、目を輝かせて学ぶのは一部の生徒で、そのほかの生徒は、「すごい」といった感想にとどまり、「自分にはできない」と、学びから離れてしまう生徒も少なくありませんでした。

そうした経験を踏まえて、今心がけているのは、生徒が学習内容を「自分事」として学べる授業づくりです。学習内容を生徒の日常や身近なものに結びつけることなどにより、「なぜ、これを学ぶのか」を、自分なりに考えられるようにしています。

●私の発問・課題設定の観点

理想のスマホアプリを考える課題を通じて、学習内容を自分事化させる

プログラミング学習の授業は、十数年前から試行錯誤してきました。初めは、「JavaScript」(*2)や「VBA」(*3)を教えていましたが、それらの言語は難しく、教師の指示通りにパソコンを操作するだけの状態になりやすいので、応用力がつきにくいといった課題がありました。そこで、プログラミング的な思考力の育成を重視し、「SCATCH」を中心にした授業に切り替えました。今では、小・中学校でビジュアルプログラミング言語(*4)を学んだ生徒が多く、難易度が少々高いアルゴリズムも授業で扱っています。

しかし、2025年度大学入試から追加される、大学入学共通テストの「情報I」では、「SCRATCH」の学習だけでは対応が難しい内容の課題が想定されています。その点に対応するため、22年度の「情報I」の授業から、「python」(*5)の学習に切り替えることにしました。

生徒にとって「python」は「SCATCH」に比べると、やや取っつきにくい言語です。スペルや文法など

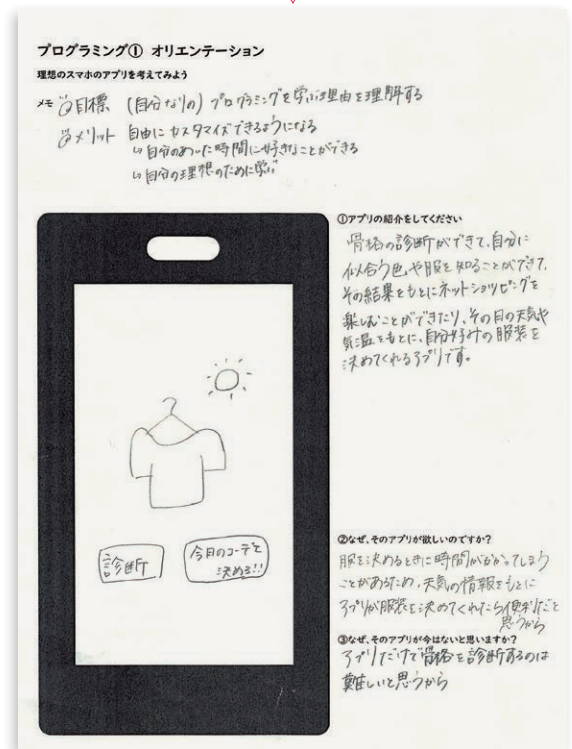
のエラーが多発すると、学習意欲を失う恐れがあります。そうしたことを乗り越えて学び続けるためには、生徒が学びの目的を「自分事」として捉えらるるようにし、「自分の生活が便利になる」「自分の人生が有利になる」といったイメージを持てるようにしたいと考えました。

そこで、プログラミング学習の単元の1時間目だった本時は、「なぜ、プログラミングを学ぶのか」を、「自分事」として理解することを目標としました。そして、その目標の達成のために行ったのが、生徒が自分の理想とするスマートフォンのアプリを考えて、発表し合う活動です。スマートフォンは、生徒にとっても生活に欠かせないツールであるからか、「天気や訪問先などに合わせて、その日に着る服を自分の服の中から選んでくれる」「医薬品をカメラで撮影すると、効能や用法が表示される」など、自由に面白いアイデアが次々に出てきました(図)。グループ内で質問や意見をし合うことで、発想がさらに広がる様子も見られました。

授業の先の世界をイメージさせて、目の前の学習への意欲を高める

本時の最後には、発表されたアプリ

図 本時のワークシート(例)



※学校資料をそのまま掲載。

りの多くが開発済みのものであり、生徒が考えたアイデアは、プログラミングによって実現できることを強調して伝えました。ただ、情報の授業だけでは、アプリ開発に必要なスキルまでは身につけません。そこで、授業の先をイメージして学べるよう、「授業で基本を学べば、プログラミングの専門書を理解できるレベルになります。そうなれば、自分で専門書を読み、自分にぴったりのアプリを作ることが出来ます」と伝えました。

本時の活動を通じて、プログラミング学習の目的を理解し、学習意欲を高めた生徒は多かったようです。ある生徒の振り返りには、「自分で理想のアプリを作ろうと思えば作れることが分かり、プログラミングに親しみが湧いた」と書かれていました。本時で、自分の理想のアプリを考えさせたのは、自分が作りたいものを発想して、言語化することの難しさを経験させたいといった意図もありました。授業で一定のスキルを身につけた後に作りたいものを考えても、アイデアが浮かばないことがあります。そこで、単元の終盤には、本時のような活動に再び取り組ませるなど、発想や表現の大切さを学び直す場を設けようと考えています。

*2 プログラミング言語の1つ。 *3 Visual Basic for Applicationsの略称。プログラミング言語の1つ。 *4 プログラムをテキストで記述するのではなく、視覚的なオブジェクトでプログラミングするプログラミング言語の総称。 *5 プログラミング言語の1つ。文法がシンプルながら、汎用性が高く、人工知能を始めとした様々な分野で活用されている。

●成果と展望

「なぜ、学ぶのか」を考えることで、学習意欲や理解度が大きく向上

各単元の最初に、その単元を学ぶ意味をしっかりと考えさせるようにしてから、授業に熱心に取り組む生徒が増えました。知識・技能が定着しやすくなり、授業後の振り返りには、学習への前向きな声が多く見られるようになりました。定期考査の問題の難易度は、前年度までと変えていませんが、22年度前期の定期考査の平均点は、例年に比べて大幅に向上しました。

それらの変化の要因の1つとして、私が作成した各授業の解説動画を、生徒が予習や復習、テスト勉強に活用していることが挙げられます。プログラミング学習では、授業中に解説動画を見た上で、グループで相談しながら学習を進め、自分たちの力では分からなかった点を私に質問するといった展開になります。

これからも、「なぜ、これを学ぶのか」を考えることを出発点として学びを深め、社会や生活で役立つスキルとともに、論理的思考力や問題解決力などの育成に努めていきます。

VIEWnext ONLINEでは、
本時の授業の様子を
ダイジェスト動画で紹介！

VIEWnext ONLINE

検索



稲垣先生から

情報科担当教師へのメッセージ

今の時代、教師を上回るICTスキルを持つ生徒は、珍しくありません。それは教師にとってマイナスではなく、その生徒の知見を生かして、生徒同士が学び合える場をつくることができます。そうしたこととともに、すべての生徒が情報の基礎を着実に身につけるように支援することが、情報科の教師の重要な役割だと考えています。「情報Ⅰ」が2025年度大学入学共通テストの出題科目になることもあり、情報に対する生徒の学びの意欲は高まっています。情報科担当教師の横のつながりも大切にして、よりよい授業を一緒に作り上げていきましょう。また、私が作成した解説動画は一般公開しています。授業の事前課題にしたり、授業で視聴したり、自由にご活用ください（下記URL参照）。

<https://inagaki-shunsuke.jp/teaching-material/>



単元の指導計画

【教科・科目】情報・情報Ⅰ 【分野・単元】コンピューターとプログラミング 【テーマ・作品】プログラミング 【設定時数】全11時間（本時は1時間目。なお、10・11時間目は、別の単元を学習後、冬季休業明けに実施） 【単元目標】プログラミングを学ぶ理由を理解した上で、目的に応じたアルゴリズムを考え、適切なプログラミングができる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価 方法
1	プログラミングを学ぶ理由を理解する ①	プログラミングを学ぶ理由を理解する。 【思考力、表現力、主体性】	①本単元の目標、本時の目標を説明する。 ②自分が理想とするスマートフォンのアプリを、個人で考える。 ③4～5人でグループを組み、各自が考えた理想のアプリを発表し合う。 ④プログラミング学習の目的を説明する。 ⑤本時の振り返りを、アンケートフォームに入力。	【主体的な学び】自分が考えたアプリのアイデアを表現する。【対話的な学び】自分の考えたアプリをプレゼンテーションする。【深い学び】なぜ、プログラミングを学ぶのかを理解する。	・ワークシート ・発表
2	プログラミングを学ぶ理由を理解する ②		①前時に考えた理想のアプリを、1人45秒間で発表。聴き手の生徒は、他者の発表の中で、気になったアプリをメモしておく。 ②本時の振り返りを、アンケートフォームに入力。		
10	応用プログラミング（サーチとソート）	サーチとソートのアルゴリズムを理解し、他者に分かりやすく伝える。 【思考力、表現力、協働性】	【冬季休業中の宿題】教師が用意したサーチとソートの問題の中から、各自、取り組む問題を選択。そのアルゴリズムを理解し、説明ができるように準備をする。 ①グループ単位で発表会を行う。 ②本時の振り返りを、アンケートフォームに入力。	【主体的な学び】自分で調べて、応用問題に取り組む。【対話的な学び】難易度の高い問題をグループで話し合う。【深い学び】教師や生徒間での対話の中で、難易度の高い問題を検討することで、思考を深化させる。	・ワークシート ・発表
11	自分の考えたアプリづくりの第一歩	本単元で学んだプログラミングやアルゴリズムの知識は、自分の理想のアプリをつくる第一歩となることを知り、再度、プログラミングを学ぶ理由を理解する。 【思考力、表現力】	①1・2時間目に考えたアプリの機能のうち、本単元での学びを生かして、何をつくることができるかを考える。 ②各自の考えを発表する。 ③本時の振り返りを、アンケートフォームに入力。	【主体的な学び】自分が考えたアプリのプログラミングを具体的に考える。【対話的な学び】自分の考えたアプリが今の知識でどこまで製作できるかを発表する。【深い学び】なぜプログラミングを学ぶのかを理解する。	・ワークシート ・発表

※稲垣先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全11時間分は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」（<https://view-next.benesse.jp/>）からダウンロードできます。「TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」でご覧ください。

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

国語

日々の授業に主体的に取り組めるよう、
身につけた力を発揮する「学びの舞台」を設定
大阪府立泉大津高校 片畑友亮

9:45 漢字テスト、前回の振り返り



授業の冒頭、生徒同士で交互に問題を出し合う漢字テストを行った。次に、前時の課題「芦田愛菜のエッセーを基に読書の楽しみ方を考える」について、生徒が「学びの地図」(P.46 図)に書いた内容の一部を、片畑先生が紹介した。

本時の概要

【対象／教科／科目】 1年生／国語／現代の国語
8時間のうちの3時間目。P.47に本時の指導計画を掲載
【育成を目指す資質・能力】 思考力、判断力、表現力
【学習内容】 本単元末には、市立図書館の推薦図書コーナーで紹介する本の推薦文とポップを作成するパフォーマンス課題を行う。その本選びのポイントを探るため、読書をテーマとした川上未映子(みえこ)のエッセーを読んだ後、2つの課題に個人とグループで取り組み、本との出会い方について考えた。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

10:21 課題に個人・グループで取り組む



机間指導で、課題2が進んでいない生徒が多いと見取った片畑先生は、スクリーンに教科書を映し、ヒントになる部分を示した。5分間、個人で考えた後、再び、グループワークに移行。生徒はそれぞれ考えたことを述べ合い、課題2について考察した。

かたはた・ゆうすけ 教職歴8年。同校に赴任して9年目。進路指導部。国語科。大阪府教育センター兼充指導主事も務める。2021年度、カリキュラム・マネジメントのリーダーとして、同校の授業改革を主導。

学校概要

◎大阪府立第15高等女学校として設立。キャッチフレーズは、「君にしかできない夢(こと)が泉大津(ここ)にある」。3年間の学びと部活動、そして学校行事を通して、「人間力・教養力・協働的探究力」の3つの資質・能力を身につけることを目指す。

◎設立 1941(昭和16)年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2021年度進路実績(現役のみ) 私立大は、追手門学院大、大阪産業大、関西医療大、四天王寺大、阪南大、桃山学院大、神戸学院大などに延べ71人が合格。短大・専門学校進学157人。就職34人。



本時のキー課題

10:05 音読後、2つの課題に取り組む

主
深

4人1組となり、教科書の素材文である川上未映子のエッセーを、1人1文ずつ、交代で音読した。読み終わったら、本時の課題1「著者が言う『贅沢な読書体験』を指す文章を本文から抜き出す」と、課題2「著者が考えるお勧め本との出会い方についてまとめる」に個人で取り組んだ。

10:00 振り返りを基にペアで考える

主
対
深

片畑先生は、紹介した「学びの地図」の内容を踏まえて、「読書の楽しみ方が人によって違うのなら、どういったことに気をつけて本を選んだらいいと思う？」などと問いかけ、ペアで話し合わせた。生徒は、読書の楽しみ方について、さらに考えを深めていった。

10:30 「学びの地図」に振り返りを記入

主
深

生徒は「学びの地図」に本時の振り返りを記入し、提出した。最後に片畑先生は、次時では、単元末のパフォーマンス課題で紹介文を書くための本選びが課題となることを伝えた。「川上さんのように、目を閉じて最初に指先に触れた本を読むのもよいですね」などと声をかけ、授業を締めくくった。

10:26 課題の考察結果を全体で共有

主
対
深

課題の考察結果を全体で共有した。課題2について指名された生徒が発言できずにいると、片畑先生は、「ペアで相談しましょう」と言い、全員に1分間話し合わせた。発言ができないまま授業が終わらないようにするために、同じ生徒を指名。その生徒は、今度はしっかり発言することができた。

●私が目指す授業

自分の考えを表現し、他者と共有することを通じて、作品を深く読み解く

以前から、生徒とのコミュニケーションを重視した授業を行ってきた。ただ、私の問いかけは、一問一答形式が多く、1人の生徒と私とのやり取りが中心で、私が答えを誘導する形になっていました。その結果、生徒は、私の問いに解答するための読解にとどまっていたのです。

作品が自分にとってどんな意味を持つのかを考えながら、作品を読み解いてほしいという思いから、生徒が素材文について考えたことを表現したり、それを生徒同士で共有したりする活動を増やしました。すると、生徒は積極的に自分の考えを言うようになり、私が思いもよらなかった視点も出てくるようになりました。生徒を主体とした授業の重要性に、改めて気づかされました。

2021年度からは、カリキュラム・マネジメントの視点からの授業改善を進め、国語科内で育成を目指す資質・能力を共有し、単元計画やワークシートを統一しています。

例えば、「現代の国語」では、私

を含む2人の担当者が、単元目標や観点別学習状況の評価の3つの観点それぞれの評価基準、パフォーマンス課題などを記載する「単元設計シート」を交互に作成しています。また、そこには、作品をどのように読み取り、それを基に何を考え、テーマをどう掘り下げていくのかを明記するようにしています。そして、授業ごとの具体的な活動内容について2人で検討し、授業案やワークシートを作成しています。

そのように、授業の大枠や学習評価の方針は科目内で統一していますが、授業の進め方や進度、グループワークの内容などは、それぞれの担当者に任せて持ち味を発揮できるようにしています。

●私の発問・課題設定の観点

単元末の「学びの舞台」から逆算して授業を設計

日々の授業は、「学びの舞台」と呼ぶ、単元末に行うパフォーマンス課題から逆算して設計しています。部活動に例えると、パフォーマンス課題は公式戦で、日々の授業は基礎練習や練習試合です。日々の授業はもちろん大切ですが、それだけでは学習

意欲を保てない生徒もいます。練習の成果を発揮する公式戦のような位置づけとしてパフォーマンス課題を行うことで、生徒は日々の授業にも意欲的に取り組めると考えています。本単元のパフォーマンス課題は、「今、大人こそ読むべき本」をテーマにした市立図書館の推薦図書コーナーに置く本の選定と、推薦文とポップの作成です。図書館から、コーナー作成の依頼があり、生徒にとってやりがいのある「学びの舞台」になると考え、課題に取り上げました。

そして、単元の3時間目となる本時では、推薦する本選びに向けて、本を読む際の様々な視点をつかめるよう、読書の楽しみ方を題材にした川上未映子さんのエッセーを読んでも、お勧めの本との出会い方について、個人やペア・グループで考える課題としました。

「学びの地図」で学びや失敗を可視化する

日々の授業は、「失敗してもよい場」であることを、生徒に意識させています。「授業は練習の場だから、何度間違えても大丈夫」などと年度初めから繰り返し伝え、自分の考えを隠することなく表現できるよう、後

図 学びの地図(振り返りシート)

「学びの地図」は、毎授業の振り返りを書き込むシートだ。単元末に行うパフォーマンス課題に取り組む際、生徒がその単元で学んだことを俯瞰し、学びの連続性を持てるよう、1つの単元の振り返りが1枚の用紙にまとめられた状態になるようにした。

※学校資料を抜粋して掲載。

押しをしてきました。

本時では、課題2について指名した生徒が発言できずにいたため、全員に向けて、再度ペアで考えてみるように促し、もう一度同じ生徒を指名して、発言してもらいました。アウトプットすることができた状態で授業を終えれば、生徒は前向きな気持ちで次の学習に向かえます。1人の生徒の失敗は、その生徒だけでなく、全員にとって再度問いを深める

機会になります。失敗をそのままにせず、その場で乗り越えられるような支援を行うようにしています。

そして、日々の成功や失敗を自身の成長の糧にするためには、省察が重要です。そこで、毎授業の最後の5分間で、本時での気づきを「学びの地図」(図)に記入し、提出させています。生徒の記述にはすべて目を通し、赤字で必ずコメントして返却するとともに、ほかの生徒の視野

を広げるような記述は、次時の冒頭で紹介するようにしています。教師にとつては、生徒の学びが深まっていく過程をリアルタイムにつかめるツールになっています。

コメントをする際は、褒めるとともに、「ここはどういうこと？」などと、生徒が自分の考えを広げられるような問いかけをすることも大切にしています。私のコメントを踏まえて、さらに深い考えを書く生徒も多く、交換日記のように、言葉のキャッチボールが続くこともあります。

授業での学びが、日常生活や社会の見方を変えるきっかけとなることも意識しています。「学びの地図」での振り返りや授業での発言などに表れる生徒の気づきを取り上げて、一人ひとりの視野を広げるような声かけや発問を心がけています。

●成果と展望

「コース料理型」の授業から「バイキング型」の授業へ

授業で自分の考えを積極的に述べている様子や、「学びの地図」に書かれていた深い考察から、生徒が本気で読解に取り組んでいることが分

かり、授業改善の手応えを感じています。「授業が面白い」と生徒から言われることも、何よりの成果です。

今後の課題は、「個別最適な学び」の実現です。授業内の課題にはクラス全員が一律に取り組むので、早く終わる生徒がいる一方、全く手が動いていない生徒もいます。ただ、後者の生徒でも、単元の最後の振り返りを見ると、深い考察に至っている場合があります。学び方や学びのスピードは、生徒によって異なるにもかかわらず、その点に現在の授業は対応し切れていません。

これまでは、ある問題をどのような手順で解決するのかを、教師主導で決める、言わばコース料理のような授業でした。今後は、単元目標と授業時数を示し、問題設定やその解決の手順を生徒に委ねる、バイキング形式のような授業に移行できればと考えています。

今年度は、「言語文化」の短歌の単元（4時間）で、「バイキング型」の授業を実践する予定です。生徒が学ぶ方法や順序を考える、生徒主体の授業にすることで、1人でも多くの生徒が、自分に合った学び方を見つけることを期待しています。

単元の指導計画

【教科・科目】国語・現代の国語 【分野・単元】説得力を高めるために「書く」 【テーマ・作品】なぜ読書をするのか？ 【設定時数】全8時間（本時は3時間目） 【単元目標】読書の意義と効用について理解を深めながら、そのことについての自分の考えが的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えると、文章の種類や文体、語句などの表現の仕方を工夫することができる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価 方法
1	・ガイダンス ・「言葉を拾う」方法と効果	言葉を拾う方法や意義について理解する。 【知識、技能】	①本単元の目標、本質的な問い、最終課題（パフォーマンス課題）、学習の流れを説明する。 ②素材文を基に、引用の効果と作法について個人で考え、グループで考えを共有し、さらに全体発表で共有する。 ③本時の振り返りを「学びの地図」に記入する。	【主体的な学び】何のために、何を、どれくらいかけて、どんな流れで行い、それによってどんな力が身につくかを伝え、学習の見通しを持たせる。【対話的な学び】「間違っても大丈夫」を合言葉に、生徒が互いの発言を受け止められる場をつくる。	・学びの地図（形成的評価） ・定期考査（総括的評価）
2	・「読書の楽しみ方」とは 1	読書の意義と効用について、著者の考えを読み取る。 【思考力、判断力、表現力】	①前時の「学びの地図」の記入内容を全体で共有し、前時の課題への考えを深める。 ②読書の意義と効用について、2時間目は芦田愛菜の、3時間目は川上未映子の考えを個人でまとめ、グループ及び全体発表で共有 ③本時の振り返りを「学びの地図」に記入する。	【主体的な学び】前時の振り返りを全体で共有し、主体性を持たせる。【対話的な学び】「間違っても大丈夫」を合言葉に、生徒が互いの発言を受け止められる場をつくる。【深い学び】前時の振り返りを全体で共有し、新たな問いを投げかけることで、自身の考えが深まるようにする。	・学びの地図（形成的評価） ・定期考査（総括的評価） ・パフォーマンス課題（総括的評価）
3	・「読書の楽しみ方」とは 2				
7	・紹介文・ポップの作成 2	自分の考えが的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えると、文章の種類や文体、語句などの表現の仕方を工夫することができる。 【思考力、判断力、表現力】	①前時の「学びの地図」の記入内容を全体で共有し、前時の課題への考えを深める。 ②紹介文とポップを作成する。 ③本時の振り返りを「学びの地図」に記入する。	【主体的な学び】前時の振り返りを全体で共有し、主体性を持たせる。【深い学び】前時の振り返りを全体で共有し、新たな問いを投げかけることで、自身の考えが深まるようにする。	・学びの地図（形成的評価） ・パフォーマンス課題（総括的評価）
8	・品評会	読書の意義と効用について、主体的に考えを深める。 【主体性、多様性】	①前時の「学びの地図」の記入内容を全体で共有し、前時の課題への考えを深める。 ②作品を見せ合い、コメントし合う。 ③単元の振り返りを「学びの地図」に記入する。		・学びの地図（形成的評価、総括的評価）

※片畑先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全8時間分は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」(<https://view-next-benesse.jp/>) からダウンロードできます。TOP → 学校教育情報誌『VIEW next』 → 高校版バックナンバー」をご覧ください。

「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証し、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じてお伝えしたVIEWnext高校版2021年8月号・特集はこちら▶



マイ・ストーリー を語れる生徒を育む進路指導

「マイ・ストーリー」とは、生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を指す。総合型選抜や学校推薦型選抜（以下、推薦型選抜）を始めとするこれからの大学入試に向けて、「マイ・ストーリー」を描き、それを語れる力を生徒に育む実践事例を紹介する。

1・2年次

ポートフォリオの活用

学びや活動の「記録」を基に、 展望につながる「気づき」を促す

和歌山県立田辺高校

マイ・ストーリー
1・2年
の課題

- ・ 高校生活の中での様々な活動を通じて生まれた問題意識や感情、今後取り組んでみたいことを、ポートフォリオに蓄積させる
- ・ ポートフォリオに対するコメントや面談を通じて、「これからの展望」を具体化する

生徒の活動記録に対して 様々な教師がコメント

過去5年で、国公立大学の推薦型選抜の合格者数が2倍になった和歌山県立田辺高校。その躍進の背景にあるのが、ポートフォリオの活用と、面談での生徒の進路意識の深掘りだ。

同校の生徒は、入学直後から、活動の記録を「Classi」(*)に蓄積する。学校行事、地域での活動や個人的な体験など、様々な活動の記録を日記のような感覚で残している。と、進路指導部長の清水昌樹先生は説明する。

「本校では、1年次の1学期に、推薦型選

抜を始めとする多様な入試方式について、生徒に説明します。そこでは、ポートフォリオは、推薦型選抜で役立つだけではなく、一般選抜を受験する生徒にとっても、広い視野で進路を考えるための材料になると話しています」

ポートフォリオを作成する際のポイントとして生徒に伝えていることは、活動を取捨選択せず、できるだけたくさん書くこと、そして、「何をしたか」だけでなく、活動を踏まえて、「今後どうしたいか」までを書くことだ。「今後どうしたいか」を考えることで、学部・学科選択のヒントが見えてくる。

「Classi」のポートフォリオには、地域の

ボランティアへの参加、大学教授や社会人による講演会の感想など、様々な活動の記録が日々蓄積される。清水先生を始めとする進路指導部の教師、そして各学年団の担任が、それらに目を通す。2学年主任の川本将斗先生は、ポートフォリオを充実させるためには、生徒に校内外の多様な活動を紹介すること、活動に参加した生徒の振り返りに対して、教師がしっかりとコメントすることが必要だと説明する。

「生徒のポートフォリオには、担任以外の教師も積極的にコメントするようにしています。教師が反応することで、ポートフォリオを作成する生徒の意欲が高まるからです。また、活動したことを書いただけの生徒には、『どんな気づきがあった?』『次はどうしたい?』などと『Classi』上で問いかけ、振り返りを掘り下げるようにしています」

そして、ポートフォリオの内容や『総合的な探究の時間』での発表の様子などから、活動を通じて大学での学びにつながる問題意識を持つことができた生徒に注目する。そうした生徒には、1年次からでも問題解決につながる研究を具体的に考えさせるため、個別面談で大学の情報を提供していると「言う」。

「これまで」と「これから」の 接続を面談で支援

同校では、2年次の3学期に、その時点で

「マイ・ストーリー」を生徒と紡ぐためのポートフォリオの活用

ポートフォリオ

① 将来につながりそうなコンテストへの応募、課外活動の参加などを促し、活動内容を記入させる。その際、活動によって生まれた問題意識や感情、今後取り組みたいことも記入するよう伝える。

② 担任だけでなく、様々な教師が生徒のポートフォリオにコメントを加えることで、生徒のポートフォリオ作成へのモチベーションを高めるとともに、経験から得られた気づきや、将来につながる問題意識を掘り下げる。

③ ポートフォリオの内容を踏まえて、「これまで」と「これから」を生徒がつながられるように支援する。「これから」につながる具体的な進路（大学・学部・学科、学問、職業など）を例示する。

貴重な体験をしている生徒、希望進路に関連するコンテストで賞を獲得した生徒などを中心に、ポートフォリオをチェックし、体験を通じて、今後につながる問題意識を持つことができていない生徒を見つける。そうした生徒には、1年次からでも問題解決につながる研究を具体的に考えさせるため、個別面談で大学の情報を提供する。

面談

志望理由書

①～③を通じて、生徒のポートフォリオの内容は充実し、志望理由書の作成の準備が整う

※学校資料と取材を基に編集部で作成。



左から／楠部正寛（3学年担任・前3学年主任）、清水昌樹（進路指導部長）、川本将斗（2学年主任）、保富仁之（進路指導部・国公立大学推薦担当）

学校概要

- ◎設立 1896（明治29）年
- ◎形態 全日制／普通科、自然科学科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東京大、京大、大阪大、神戸大、和歌山県立医科大などに101人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、同志社大、関西学院大などに延べ521人が合格。

ポートフォリオの内容を基に、志望理由書をまとめ、「マイ・ストーリー」へと昇華する指導を、さらに詳しく紹介！

VIEWnext ONLINE ▶▶



の志望校の志望理由書を作成する。志望理由書では、これまでの経験を踏まえて、大学で学びたいことを語ることが求められるが、「これまで」と「これから」を意識させるのが面談での問いかけだと、清水先生は考える。

「面談でも、これまで取り組んできたことに対する『感想』ではなく『気づき』を語るために問いを重ねます。そして、様々な学問や職業を紹介することなどを通じて、その気づきを自分が学びたいと思う学問につなげることで、志望理由書を作成する準備を整えます」

伝統的に面談を重視する同校では、定期考査後や模擬試験後などに面談を実施しており、その実施回数は、年間で10回に迫ることもあると言つ。面談では、ポートフォリオでつかんだ生徒の興味・関心を刺激し、「これから」につなげている。

「例えば、オープンキャンパスに参加したことを『Class』に入力した生徒に、『自分の将来に関係ありそうだったことは？』と聞いたり、『君が関心を持っているのはどんな学問かな？』などと生徒に情報を提供したりします」（川本先生）

川本先生は、ポートフォリオ上はメモレベルの内容しか書けていない生徒も、面談をする中で、活動していた時に抱いた感情を思い出し、それを足がかりに、「これまで」と「これから」を豊かに語り出すことは少なくないと説明する。

「『これまで』と『これから』をつなげるとはどういうことか、自分らしい言葉とはどんなものを面談を通して理解した生徒は、その後、ポートフォリオの内容も充実していきます。ポートフォリオと面談が相乗的に進路意識を醸成するのだと思います」（川本先生）

低学年次からの就職観の育成 1年次・2年次

学校と実習先、 2つの学びで 就職観を育成

高卒就職の指導では、1・2年次に就職観を育成することが不可欠だ。社会で働くにあたって、どのような力が求められるのかを早期に知っておくことは、高校での学びを充実させるという点でも重要である。

就職観の育成の指導モデルの1つに、学校での座学と企業での実習を組み合わせた「日本版デュアルシステム」がある。2004年度に、ニート・フリーター問題、若年層の離職率の高さなどを背景として文部科学省が始めた取り組みで、普通科高校で唯一対象となったのが、大阪府立布施北高校だ。現在、同校は、エンパワメントスクール（※1）に改編。「日本版デュアルシステム」の経験を土台に、1年次に2日間のインターンシップ、2・3年次には週に1回、地元企業等での職場体験実習（以下、デュアル実習）を行っている。総合学科部長の川本祥也先生、進路指導部長の渡邊大地先生に話を聞いた。

実践事例

週1回の「出勤」で、働くための力を育む
大阪府立布施北高校

年間20日間の職場体験 「デュアル実習」

布施北高校では、地元企業等の協力を得て、「エンパワメントタイム（※2）」の授業内で、1年次は、全生徒が2日間のインターンシップに、2・3年次は、選択科目として履修する生徒が毎週1回、6時間のデュアル実習に取り組み（図1）。

2・3年次のデュアル実習の日は、生徒は実習先の勤務時間に合わせて「出勤」する。教師は1人あたり10社程度を受け持ち、実習日は担当の実習先を巡回して、生徒の様子を確認。実習先の担当者から聞き取った実習内容や生徒の業務状況を、担任などと共有する。

年間20日間程度の職場体験となるデュアル実習だが、そのねらいは、社会で働くために必要な基礎力を育成することだと、川本先生は説明する。「毎朝決まった時間に出勤する、職場の同僚や取引先にきちんと挨拶をする、敬語を正しく使うな

図1 教育課程 3年間を通して行われるエンパワメントタイム

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1年	現代の国語			基礎数学			シヨニイ			体育	保健	音楽I 美術I 書道I	家庭基礎	情報I											エンパワメントタイム					10分学習
2年	言語文化	歴史総合	公共				英語			体育	保健																			
3年	論理国語	地理総合	数学II							体育																				

※学校資料を基に編集部で作成。

※1 大阪府教育庁が指定する総合学科高校。「モジュール授業」や「エンパワメントタイム」などの特徴的な授業を通じて、つまづいているところを徹底的に学び直し、社会で活躍するために必要な力を身につけることを目指す学校。

※2 エンパワメントスクールにおける、「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「選択科目の一部」から成る授業。グループ学習形式や参加体験型学習形式の授業の中で、「正解が1つではない問い」について考え、話し合うことを通じて、思考力や表現力、コミュニケーション力、チームワーク力を養成するとともに、進路観の醸成も図る。

図2 デュアル実習日誌（表面）

第()回 実習		
デュアル実習日誌	実習日 月 日 () 候温 °C 出席状況 出席 ・ 欠席 ・ 遅刻 ・ 早退 担当教員名 先生 出勤時刻 : 退勤時刻 :	
時間	実習内容 具体的な仕事内容・指示されたこと 等	
午前	生徒が実習の度に提出する日誌。 裏面には、「学んだこと、気づいたこと、疑問に思ったこと」「うまくいったこと、うまくいかなかったこと」などを生徒が書く欄と、実習先の担当者と担当教師のコメント記入欄がある。	
午後		
本日の目標		
【自己評価】 A: よくできた B: だいたいできた C: 不十分だった		
1	「デュアル実習 三か条」を守って取り組むことができた	A・B・C
2	体調管理を含め、心身ともに万全の準備をして臨むことができた	A・B・C
3	「何をすべきか」を常に考えながら行動することができた	A・B・C
4	誰とでも積極的にコミュニケーションをとることができた	A・B・C
5	「なりたい自分」や進路目標を意識して取り組むことができた	A・B・C

※学校資料を基に編集部で作成。

首席・総合学科部長

川本祥也 かわもと・よしや

教職歴 12 年。同校に赴任して 8 年目。

進路指導部長

渡邊大地 わたなべ・だいち

教職歴 11 年。同校に赴任して 6 年目。

学校概要

- ◎設立 1978 (昭和 53) 年
- ◎形態 全日制／総合学科／共学
- ◎生徒数 1 学年 180 ～ 210 人
- ◎2021 年度進路実績（現役のみ）
4 年制大は、大阪観光大、大阪経済法科大、大阪人間科学大、摂南大などに延べ 11 人が合格。短大・専門学校進学 50 人。就職 73 人。

毎週1回6時間のデュアル実習を選択する生徒に、どのような支援をしているのか、総合学科部長の川本先生が、さらに詳しく紹介。

VIEWnext ONLINE ▶▶▶▶



ど、社会人としてできて当然のことを、実習を通して生徒に理解させ、身につけさせます。また、実習で学んだことを振り返り、自分が改善すべき点を見つけ、それを次の実習までに改善することも重視しています」

デュアル実習を始めるにあたっては、事前に学校から実習先に、生徒の性格や進路目標、生徒を見守る上で知っておいてほしい情報を伝えている。「普段の高校生活で頑張っていることはもちろん、『強い言い方をされるのが苦手な生徒なので、こんな伝え方をしていただけませんか』などと、生徒に合わせた指導を実習先をお願いしています。毎回必ず巡回するのは、生徒の様子だけでなく、実習先が困っていることはないかを聞くことで、実習先と良好な関係性を保つためでもあります」(川本先生)

生徒と実習先の双方の状況を把握し、問題があれば、次週の実習までには改善していると、川本先生は言う。

職場体験を支える エンパワメントタイムでの対話

就職観の育成において、インターンシップやデュアル実習と並んで重視しているのが、エンパワメントタイムでの生徒主体で進める対話の時間だ。「なぜ、私たちは働くのかや、自分の強み・弱み、社会問題などをテーマにグループで話し合ったり、自分の意見を作文にまとめます。デュアル実習の選択者は、この時間に、実習の際に記入した実習日誌（図2）を使って、生徒同士で実習についての情報交換や振り返りをします。エンパワメントタイムでの学びが、インターンシップやデュアル実習をよりよいものになっています」(川本先生)

多くの生徒は、デュアル実習の経験を踏まえて希望職種を考えていると、渡邊先生は語る。

「3 年次に行く希望職種の検討では、生徒は、希望する職業が自分に向いているかどうか、デュアル

ル実習の経験を基に判断しています。また、低学年次から学校外の大人とかかわる経験を多くしたことで、3 年次の職場見学や企業との面接時に、堂々と振る舞える生徒が多いように思います」

デュアルシステム導入前は、同校の卒業時の進路未定者は約 48% だったが、現在は、高校幹旋による就職を希望している生徒のほぼ全員の進路先が決定するようになった。そのような成果を上げているデュアル実習だが、すべての生徒に必須の活動とする必要はないと、渡邊先生は考えている。

「生徒の半数程度は、デュアル実習を選択せず、資格試験対策の授業などを選択します。その理由は、目指す進路につながる経験はデュアル実習ではできないから、進学に向けて勉強を頑張りたいからなど、いずれも納得できるものです。エンパワメントタイムで自己理解を深め、進路を考えたい生徒が、自分に必要だと判断し、主体的に参加するからこそ、デュアル実習での学びが豊かになるのです」



チーム 新課程 学年主任

Supported by
ベネッセ文教総研

11月

12月

のポイント

キャリア意識を高め、読解力・思考力の育成へ

テーマ

コンテンツ例

2学期になり、いよいよ2年次の文理選択や選択科目の決定時期になりました。生徒はこれまでの授業、学校行事、課外活動での学びや気づきを踏まえて、高校生として最初の進路選択に臨みます。この時期は、生徒が自分自身のやりたいことを軸にキャリア・進路を深めるための指導と、その軸を貫き通すための基礎学力の定着、そして、2年次以降の学習を見据えた、足腰の強い読解力・思考力の確かな育成が必要となります。

●キャリア・進路を深めるための指導について(文理選択)

文理選択、科目選択については、既に各校では、生徒の希望を集約している頃かと思えます。各大学の2025年度入試科目の情報が十分出そろっていない状況だからこそ、生徒には、教科・科目の得意・

不得意ではなく、本当にやりたいことを大切にして、文理選択とその先の進路に思いを巡らせてほしいところです。生徒には学問や学部・学科・職業に関する知識を増やさせ、現時点での教科・科目の得意・不得意にとらわれている生徒には、基礎学力の定着に向けて、今後どのように学習を進めれば苦手克服が可能か、見通しを持たせることも重要です。大学入試において、高校での探究学習を生かすような総合型・学校推薦型選抜が増えてきました。探究学習をする中で、追究したい学問が見えてくる生徒も出てくるでしょう。担任の先生が、そういった生徒の気持ちを酌み、進路指導部と学年が連携して、教科学力だけでなく、多面的に生徒を見る進路検討会を年度内に行えば、生徒にとって意欲的な進路選択が実現するはずです。

11・12月のチェックポイント

数か月先を見通した新課程初年度学年ならではのポイントです。詳細は**ハイスクールオンライン〈先生SNS〉**でご覧ください。

12月

□ 保護者会・三者面談の実施

● 保護者に伝えたい入試の最新情報等の配布資料

□ 2学期末・年度末の観点別学習状況の評価に向けた改善点

● 観点別学習状況の評価の方法の整理

□ 2年次の選択科目の確定に向けたチェックポイント

● 新課程入試科目公表状況と、理科、地理歴史・公民科の科目選択時の留意点

11月

□ 生徒を多面的に見る進路検討会の計画

● 生徒を多面的に見た時の一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜それぞれに向けての適性の見極め

□ 基礎学力の定着、思考力育成

● 「ベネッセ総合学力テスト」直後の指導

ハイスクールオンライン 〈先生SNS〉

<https://teacher.benesse.ne.jp/>



※ハイスクールオンラインのIDをお持ちでない先生は、校内でご確認いただくか、WEBサポートデスク0120-350124までご連絡ください。

〔受付時間〕
月～金 8:00～18:00 / 土 8:00～17:00
(祝日、年末・年始を除く)

ここからお入りください

ほかの先生に相談したい時は⇒**相談室**へ
使える資料で負担軽減⇒**資料室**へ



チームの仲間へmessage

教師の「探究」が
学年や学校を活性化する!
 よう へい
野田庸平

埼玉県・川口市立高校 1学年主任

新学習指導要領に基づく指導と観点別学習状況の評価の実施に加え、本校1学年は、1人1台端末の導入、SSHの指定と、様々な変化の渦中でのスタートとなりました。それらの変化に対応するヒントは「探究」にあると、私は考えています。

学年団では、指導目標を「挑戦と内省を繰り返し、互いに学び合う生徒の育成」と定め、協働的に「探究」する学びを推進しています。手帳とGoogleフォームで、生徒の学習状況を教師も把握し、生徒に声かけをすることで、生活や学習の習慣を律することができるように支援しています。

私は「総合的な探究の時間」の主担当で、探究プログラムを一から作っています。「自己と一体的で不可分な課題」に取り組むことを通して、「よりよく課題を発見し解決」という目標を達成するために、「進路と資格」「自由論文の作成と発表」を2つの大きな柱とする活動を行っています。これらの活動の、生徒の思考の跡を記録に残すために、思考ツールとICT機器を用いています。「自由論文」の準備に際しては、若手の教師に大学での卒論・修論作成の経験話をってもらうことで、生徒への動機づけだけでなく、教師も生徒とともにSSHに取り組む雰囲気や、校内に醸成したいと考えています。

生徒が「探究」するために、教師も「大人の自由研究」として、教材・授業研究や部活動指導に限らず、趣味や社会活動を深め、楽しみ、学ぶ姿を見せ、生徒の学びを誘発することが理想です。

学年主任としては、先生方の「納得」を得つつ、「持続可能な」教育活動の実現を目指しています。初の学年主任かつ30代半ばで、至らぬ点もありますが、対話を通して、学年、学校の課題を1つずつ乗り越えていきたいと思っています。

●読解力・思考力の
確かな育成について

SNS上で単語や短文でのやり取りがあたり前になる中、「読解力」の育成の重要性が指摘されています。読解力を土台に高度な思考力が積み上げられるため、大学入試でも、国語や英語のみならず、全教科で読解力が不可欠です。適切に読解できているか、深い思考につなげられているかを判断する材料は、アウトプット物です。授業やテストで生徒のアウトプットの機会を意図的に増やし、2年次以降の読解力・思考力の育成につなげましょう。

少人数での「テーマ別情報交換会」を
開催しています!

これまで、4月、7月とウェブセミナーを実施し、情報発信をしてまいりましたが、先生方が少人数で濃密に情報交換できる場として、「テーマ別情報交換会」をスタートしました。

第1回の情報交換会は「生徒のキャリア意識を学年団で高める進路指導とは」をテーマに開催しました。地方公立進学校や都市部の私立高校など、多様な学校の先生方が参加し、まずは「そもそも高校で育むべきキャリア意識とはどのようなものか」について話し合いました。そこでは、キャリア意識とは自己理解に根差した、高校卒業後も生きる上で必要なものであり、決して就職や進学局面にとどまるものではないことを確認しました。その上で、キャリア意識を高めるための方策や留意点として、次のような意見が出ました。

 生徒が自由に発言できるような学校文化があってこそ、生徒は主体的に行動できるようになり、キャリアを自ら形成する力が育まれる。

 将来にわたっての学びを考えた時に、大学入試を高校までの学びのゴールではなく、今後も学び続けるための「資格」として考えさせることが重要だ。

 生徒の中には探究学習から進路のヒントを見出す者もある。探究学習と進路が結びつきつつある生徒を見逃さず、推薦型選抜への意識づけを図りたい。

参加した先生方からは、「県を越えたつながりをつくることができよかった」「オンラインであっても、少人数で対話することで、自校の課題を発見したり、共通の課題感に気づいたり、また、それらの解決のアイデアが浮かんだりした」などの感想をいただきました。先生方はいずれも初対面でしたが、最後は「またこのメンバーで集まりたい!」といった声も聞かれ、少人数のよさを満喫いただいた情報交換会となりました。

今後の少人数での「テーマ別情報交換会」は、11月5日に「生徒の自己肯定感を高めるには」、11月19日に「1年3学期から2・3年次までの計画をどのように立てるのか」などのテーマで、計画しています。

ご興味のある先生は、下記までお問い合わせください。

お問い合わせ先

フリーダイヤル 0120-350-455

受付時間 月～金 8:00～18:00

土 8:00～17:00 (祝日・年末・年始を除く)



今号の「輝く学年団を訪ねて」の取材でお邪魔した、「山村留学」の受け入れ先でもある岩手県立葛巻高校は、北上山地の大自然に囲まれた高原に位置します。豊かな緑を生かして写真を撮るべく、カメラマンは、手で作った四角い枠を校内のあちこちでかざしては、鋭い眼光で風景を切り取り、撮影場所を吟味していました。

同コーナーや表紙の撮影では、約1時間をかけてロケーションハンティングをして撮影場所を決め、撮影する枚数は数百枚にも上ります。取材時にそう伝え、多くの先生は驚かれますが、決して冗談ではなく、その数百枚の中から、「その学校らしさ」「先生同士や生徒と先生の関係性」が最もよく表れた一葉をえりすぐるのです。取材で感じたかけがえのない空気感や、先生方の熱い思いを写真や文章に載せようと、スタッフ一同、目を磨き、筆を研ぐ日々です。(河野)



VIEWnext
電子ブック 高校版は

電子ブックで閲覧できます

『VIEW next』高校版、『VIEW21』高校版
2020年4月号以降の記事は、電子ブック
でご覧いただけます。ウェブサイト「VIEW
next ONLINE」でご確認ください。
HOME → 学校教育情報誌『VIEW next』
→ 高校版バックナンバー
<https://view-next.benesse.jp/>

VIEWnext

高校版 2022年12月号

12月15日発刊

(予定)

『VIEW next』高校版は
年6回の発刊です

先生方から
ご意見を
紹介します

Reader's VIEW

2022年8月号へのご意見

管理職と一教師が両輪で改革を

8月号の特集「新学習指導要領下の授業改善」の課題整理に示されていた4つのポイントを読み、管理職から進める改革と、一教師から進める改革が、両輪となって機能することが重要だと分かった。静岡県立静岡東高校が実践する「総合的な探究の時間」は、まさにその両輪が結実していると感じた。そして、同校だけでなく、ほかの2校の実践事例からも、学校改革を前進させる上で不可欠と言える、教師同士のリスペクトが垣間見え、改革を進める環境を粘り強くつくることの重要性を再認識した。

愛知県立大府高校 野々山 新

生徒が主語、それがこれからの改革の鍵

8月号の特集「新学習指導要領下の授業改善」の本特集テーマの next で、上智大学の奈須正裕教授が述べられていた教師の役割の変化は、私も授業改善で常に意識していることであり、若手教師にも意識するように伝えている。課題整理の冒頭にもあったが、「生徒を主語に」が、これからの改革の鍵であると再認識できた。そして、「指導変革の軌跡」で紹介された埼玉県・私立春日部共栄中学高校の実践は、まさに「生徒を主語に」した改革だった。定期考査の回数の削減や学期制・授業時間の変更などに対する校内の意見は、「教師が主語」で語られることが多いと感じている。今まであたり前に行われてきたことでも、「生徒を主語に」して見直せば、修正したり、廃止したりするべきものもあるだろう。同校の取り組みには、参考にすべき点が多くあった。

千葉県立銚子商業高校 田中 三郎

事故をひとつとにしないため、対応の基本を再確認

度重なる園児バス置き去り事故などの多くが、事故が起こる前にいくつも事故を防ぐ機会があったであろうことを考えると、8月号の「学校危機管理 基礎講座」で紹介されたハインリッヒの法則の通りだと思う。しかし、学校現場では、事故がひとつとで終わってしまうことが多いと感じる。ほかで起きた事故をいかに自分事にできるか、事故を未然に防ぐ点検項目を正確に実行できるか、1人が見落としても、ほかの誰かがカバーできるか、生徒に安全教育を徹底できるかなど、事故防止に向けての取り組むべき課題は山積みだ。同コーナーを読み、事故時の対応の基本を再確認しようと思った。

静岡県 匿名希望

今の時代だからこそ生まれる、新たな取り組みに注目

8月号の「マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導」で、岩手県立福岡高校が実施していた、生徒間で大学入試対策の進捗を共有する方法について、なるほどと思った。今の大学入試の動向・形態だからこそ生まれた取り組みであり、ほかの生徒の入試対策の進捗が分かることで、自分の入試対策へのモチベーションが向上する点が、とても有効だと感じた。予測不可能な時代の中では、そのような新たな視点を得られる事例が次々に出てくると思うので、今後も注目していきたい。

福岡県・私立大牟田高校 荒木 信一

VIEWnext 編集部からのお知らせ

本誌特集テーマとも連動!

新学習指導要領に対応した大学入試をテーマとするオンラインセミナー
高大接続の視点で見通す2025年度大学入試のご案内

プログラム
(予定)◎**情報提供** 高校教育・大学入試・大学教育・社会の
トレンドと、2025年度大学入試の見通し◎**パネルディスカッション** 高大接続の視点で語り合う、
これからの大学入試参加申し込み
締め切りは**11月7日(月)**詳しくは、本誌26ページを
ご覧ください。開催日時 **2022年11月11日(金) 16時00分～17時30分**形式 **オンライン(ライブ配信)**参加費 **無料**

※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。

VIEWnext ONLINE ウェブオリジナルコンテンツ 続々リリース!

TOPページ→  **学校教育情報誌『VIEW next』**からご覧いただけます。本誌連動
記事「もっと知りたい!」の声にお応
えして、誌面でお伝えしきれな
かった内容をご紹介します。これからの
進路指導のための世の中**トレンド**解説

今号 P.38 と連動

マイ・ストーリーを語る

生徒を育む進路指導

今号 P.48-49 と連動

変化の激しい社会に飛び込む生徒に伴走
クローズアップ! **就職指導**

今号 P.50-51 と連動

ダイジェスト
動画

発問・課題設定をキーに見る

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

今号 P.40-43と
連動誌面で紹介した授業実践が
動画で見られます。今号は、
「情報Ⅰ」の授業です。東京都立神代高校の稲垣俊介先生によ
るプログラミング学習の導入の授業の
ダイジェスト動画です。生徒の学習意
欲を高める工夫が分かります。アクセスは
こちらから!URL <https://view-next.benesse.jp/>

検索ワード

VIEWnext ONLINE

検索

2次元コード



VIEWnextのLINEを友だち登録いただければ、冊子の発刊時や新コンテンツの公開時に
 通知が届き、VIEWnext ONLINEの該当記事に、**ダイレクトにアクセス**できます!

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

友だち登録の方法は、右の2次元コードを読み取っていただくか、LINEアプリの
 「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いい
 たします。



次の
一歩C o v e r
S t o r y

大久保泰希 先生

Okubo Taiki

群馬県立高崎高校

志を高く持ち、
ありたい自分を
追い求める赴任後、初めて見た伝統の翠巒祭(文
化祭)。1万人以上が来場する行事の企画・運営のすべてを担い、問題が起
きて、皆で協力して解決する生徒の姿
に圧倒されました。当時、教職5年目だっ
た私は、そこで発揮されていた物事を深く
考える力をさらに伸ばせるようにと、担
当する英語の授業で、生徒同士の対話を基
本とする言語活動の研究を重ねました。そして、卒業後、社会をリードする役割
が期待されている生徒に、社会に貢献す
る志を持つてほしいという思いから、現在
は、衣服ロスや地球温暖化など、教科書の

素材文の内容に関連する社会課題につい
て調べて、自分の考えを英語で述べ合う活
動を授業の軸としています。昨年は、英語
ディベートに初めて挑戦しました。県の英
語研究会で指導法を学び、大学教育の無
償化や日本の首都移転の
是非をテーマに、肯定・否
定の両方の立場を経験し
た後、改めて自分の意見を
書く場を設けました。

そうした授業をする中
で、「新たな考えを生み出
せるようになった」「賛否
両面を考える習慣が身に
ついた」といった声が生徒
から聞かれるようになりました。ある生徒は、病院
での長い待ち時間に疑問
を抱き、医療のデジタル化
を探究学習の課題にして
探究を進めた結果、県のビ
ジネスコンテストで入賞。
「大学では、社会に役立つ
データサイエンスの研究を
したい」と、意欲的に話してくれました。

生徒は、私の想像をはるかに超えて成
長していきます。私も一緒に成長していけ
るよう、教師としてありたい自分をこれ
からも追求していきます。



生徒より

各

自が強烈な個性を持ち
ながら、団結力が強いのが、大久保クラスの誇りです。
大久保先生は、部活動や生徒会
活動など、それぞれが熱中して
いることを尊重し、応援してく
れたので、私たちも互いを認め
高め合う関係になれたのだと思
います。英語の授業でも、互いに
考えたことを述べ合えるので
視野が広がり、社会課題につい
て深く考えるようになりまし
た。「社会とつながって、自分は
何ができるのかを考えよう」と
いう大久保先生の言葉は、自分
のあり方や将来を考える時の
道しるべだと思っています。

おおくぼ・たいき 教職歴10年。同校
に赴任して6年目。3学年担任(SSH
コース。教務部。SSH部。外国語科
(英語)。

群馬県立高崎高校 全日制/普通科/
男子校/1学年約280人/2022
年度入試合格実績(現浪計)国公立大
は、北海道大、東北大、筑波大、群馬大、
東京大、一橋大、京都大、大阪大などに
168人が合格。私立大は、慶應義塾大、
早稲田大などに延べ759人が合格。

お客様サービスセンター

フリーダイヤル 0120-350455 [受付時間] 月～金8:00～18:00/土8:00～17:00(祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17